セミナリオ

白神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セミナリオ

【Ｎコード】
Ｎ５１６２Ｚ

【作者名】
白神

【あらすじ】
もし、人間達が信じていた神に兵士として神軍に招集され、戦うことを余儀なくされたら貴方はどうするか、この物語は普通の人間の感情を持った高校生が神に抗うというもの。第二章に突入したこの物語は第一章で波乱万丈な出来事を起こしている。女になったり世界でたった一人の家族である妹と戦ったりとまあ、第一章ではよく分からないままセミナリオに入学する主人公・子無舞久は神だの世界だの考えずに戦います。とにかく戦います。時には笑い、時にはシリアスに、時には泣ける物語です。漫画も本気で描いてますが

小説も勿論本気で書きます。下手な文章で分かりづらいかもしれませんがお読みください。

プロローグ―神からの挑戦状（前書き）

初めてなのでよろしくお願いします。

プロローグ―神からの挑戦状

神は人間に能力を与える。それは特定ではなく、平等に与えられる。
だが歳をとるにつれて
その能力は弱小化し消える
だがその能力をとどめる者も存在しその者達は一様に苗字に「神」
の言がある

その者達は自分では能力の存在を認識できない。
そして彼らは１５歳になった時
神に神軍に招集されて
死ぬまで戦う運命を背負う
つまり神は人間に能力を与え熟すと神軍に誘う

だが神も猶予を与える

ある挑戦状を送り付ける

それに勝てば招集は拒否される。
そして能力も変わりなく
存在する
ところが勝利したものはいない
彼が現れるまでは…

さてこれから始まるのは
神の挑戦に打ち勝ち、神に仇なした少年の物語―

――――――

９時２０分　７月

蝉が縦横無尽に鳴き喚いている
松尾芭蕉の俳句にも蝉について詩ってたなと思ったが今は関係ない。

今の俺には不快でしかないなぜなら来たからだ
手紙が

学校に行ったら靴箱に手紙が入ってて女の子からのラブレターかなと思ったら魔王からだったみたいな
そんな感じ

そして学校から出て
手紙を確認する

書かれていたことは

「手紙を受け取ったと同時に1時間の猶予を与える。当事者は時間内に世界で一人だけ当事者を覚えてくれる人物を探す。
もし見つけることができれば生き残り、できなければあなたを狩りに行きます。幸運を。」

いたずらだと思ったが
念の為だ
友達に電話しようと携帯をだし電話した。

だけど
「誰？」と冷徹にことごとく言われた

もちろん電話帳にあるやつ全員に電話した。
でも全員出なかった。
たぶん全員の携帯に俺の連絡先はないだろう。
だからみんな知らない電話番号からだから出なかったんだ
「母さんと父さんなら…」
そう思ったが
母さんと父さんはもう死んでいる。
俺が6歳の時に交通事故でだ
それに双方のじいちゃんとばあちゃんも死んでる。
だから俺は
「世界で一人か」
絶望した
泣きそうだ。
その時俺の頭の横を蝉が
通り抜けた。
俺は反射的に頭を上げた。
「綺麗だな」
今俺がいるのは丘の上
ここから眺める景色は
本当に綺麗だ。

それに今は夏で入道雲が
厳かに浮いている。

「この景色もこれで見納めか…」
どうせ俺は世界で一人と俺が人生最大の憂鬱を迎えた時

「……ま……会おう……」
脳の中で声が響いた
そして映像が流れる。
今俺がいる同じ丘で黒髪ロングの少女が囁いている。容姿端麗の少女は笑いながらでも切なそうに…
と、そこで我に返った。

「なんだ?今の…」
おかしい気分だ。全然知らないと認識できればいいのに俺は知ってる。
名前も思い出せない
でも…
彼女なら俺を憶えているかもしれないと思ったが
俺が忘れてるんだ
憶えているはずないじゃないか

「はあ　俺本当に独りだ…」

「み〜つけた。」
陽気な声が聞こえ、後ろを振り向く。

そこには、黒と白を基調とした制服のようなものを着た髪をツインテールに束ねた少女が立っていた
俺と同じくらいの歳だ

「まさか…」

見覚えはないが俺のことを憶えているのかと期待したが悉く崩される。

少女は鎌を持っていた

そして

「あなたを狩りに来ました♪」

人生の終了を告げる悪魔が立っていた。

プロローグ―神からの挑戦状（後書き）

ちょっと変なところで終わりましたが区切りが良かったので終わりました。
主人公の名前は次回判明します。
次回もよろしくお願いします。

最初の抵抗（前書き）

読んでいただければ幸いです。

最初の抵抗

ツインの少女が宣告して3分くらいが経った。
俺は我に返り言葉を紡いだ。
「嘘だろ…だって時間は！」
「もう時間は経ちましたよ。きずかなかったの？悠長ですね～～」
くそっ俺が鬱期に入ってるうちに時間が経ってたのか
でもどうせ無理だったし、悔しがっても仕方ないか。すると俺の気分とは対称的な声で少女が、
「じゃあ狩らせていただきます。」
と言い、ゆっくりと俺の所に歩いてきた。

――――――――

同時刻

丘を登る道を黒髪ロングの大和撫子を彷彿とさせる少女が走っている。
かなり急な坂をもはや人間の成せる速度を超越した早さで走っている。

徐々に進んでいくと、遠くに2人の人物を把握することができた。
1人は男でもう1人は鎌を持った少女。少女はゆっくりと男に近づいている。少女はその異質な光景をみても動じない。そして彼女は少し安堵した表情を見せたがすぐに真剣な表情に戻る。
「……舞久……」
速度を更に上げ、走って行った。

――――――――

ツインの少女は、男の前に立ち
「私の名を言っておきます。私は、エルン・ディライト以後おみしりおきを」
「俺の名前は…」
礼儀だと思い名前を言おうとしたがエルンに止められる。」

「知ってる～子無舞久でしょ～なんで苗字に神の言がないのに神軍に招集されるのか知らないけど」

「は？神軍って…」
俺は聞こうとしたがエルンは不敵に笑い
「これも仕事ですから♪」その言葉と同時に
鎌が振り下ろされる。
目をつぶった。そして
ジシッ
鈍い音が鳴り静寂が訪れ、俺は目の前を見て驚愕した
長い黒髪をなびかせ俺と同じ制服を着た少女が立っていた。
少女は俺の方に向き
優しく微笑んで、
「久しぶり　舞久、また、会えたね」
その笑顔を見て
すべてを思い出した。その黒髪少女のことを

――――――――
俺には幼馴染みがいた。
だけど幼馴染みは俺達が中学に上がると同時に引っ越しした。
その引っ越し前日に俺達は丘の上で話していた。

「もう会えないね。ここは東京で私は九州にいくしさ」

「そんなことないだろ。どうせ日本にいるんだからさ」
「うん、そうだね。会おうと思えば会えるよね。
舞久が来てよね。待ってるから」

「ああ、なんならジェット機で会いに行ってやるよ。」
「うん、またいつか会おうね。」
幼馴染みは嬉しそうに楽しそうにだけど泣きながらいった。

――――――――
光速のように記憶が蘇る。俺には幼馴染みがいた。
それがこの黒髪少女だ。
名前は…
「……守(まもり)……」そう幼馴染みの名前は
神瀬川　守
「お前まさか…」
「そう、私は神軍に招集された。でも舞久も招集されるのを知って助けに来たの。」「な…」
マジかよ…守も
「へ～そうか。帰世権を使ってこの世界に来たんだ。でも、あれは1回だけしか使えないのに」
「それでも、舞久を助けたかった。」
「だけど、いままさに神軍に招集される者を助ける、まあ、阻止すれば罪になる」
「ええ、わかってるっけど」守はエルンを蹴り、エルンは避け、後ろに跳んだ。
守の手には、鎌を防いだこと傷ができていて血が出ていた。
エルンが若干叫びながら
「それでどうするの！♪
私と…」
「戦うわ」

守が冷静に言う。
「舞久と二人でね。」
俺は、即座に意義する。
「ちょっと、守！
何言ってんだ！あんな鎌持った奴に勝てるわけないだろ！」
「今の舞久ならね。でも」守は、俺に手を差し出す。「私の能力があれば、行ける。私を…信じて」
俺が迷う暇はない
もうこれしか方法がない。「分かった。守が言うんだからな。」「ありがとう。じゃあ手を握って」

そして手を握った。
瞬時に空間が歪み、電流が走る。だがすぐに収まり煙が立ち込める。

「な…」
エルンは驚愕の色を隠せない。

「俺は、さっき生きることを諦めたが、前言撤回だ。神軍がなんだ？んなもん
潰してやる。」

そこには、刀を持った白髪の美少女が立っていた。

最初の抵抗（後書き）

マンガで例えるとまだ1話もいってない。ヤバイ

女になった男（前書き）

ご感想お願いします。

女になった男

日本刀を持った白髪の少女が口火を切った。
「なんで女になってんの？」白髪の少女＝舞久みたいな少女の体は当然女らしい体だが
「胸に膨らみがあるし、なにより、勲章が、俺の男である存在証明が…」
『ないね。』心の中で守の遠慮がちな声が聞こえる。
「まさか、嘘でしょ？融合するなんて…」
エルンが驚愕している。

「勲章が…俺の…」
「融合すれば、必然的に能力の高い者の特徴が繁栄される。だからあなたはいま女の子の姿ってわけよ。」「そういうことか。原因を知れて良かった。」
『立ち直ったか』
「まあ、今は目の前のこと集中するか」
舞久は刀を強く握り、体勢を低くする。
「私に勝てるかな？」
エルンは腕時計をさりげなく確認し、戦闘態勢に入る。
『守、この刀は卍か…』『無理』
「だよな、じゃあ戦るか」「後悔しないでね～」
そして、同時に土を蹴り
キィン
刀と鎌が衝突し、
「意外に速いね～」
「俺も驚いてるよ」
『確かに身体能力、反射神経は格段に上昇している。だけど、まだ…』

「だけど、まだまだだね。刀も振るったことがないのに意気がってんじゃねえよ」「な…」
エルンは鎌で連続的に切り掛かる。舞久は防戦一方で押されていく。
「私は！お前みたいな目をしてる奴が！嫌いなんだ！反吐が出る！」
舞久は防御しながら、確実に押されているが、あきらめてはいない。
舞久の目は言うなれば、青空の如く、全く淀んでいない目でエルンを見据えている。
「私は！「うるせえ」
鎌を最大限に振りかぶったエルンを舞久が言葉で制した。
「うあ……」「隙あり」
比較的美少女な容姿をしている少女が男勝りな言葉を吐いたことでエルンは硬直してしまった。
舞久はそこを見逃さずに
刀を斬り付けた。
ザァン
「ぐはあっ　く…そ…」
血が溢れ、エルンは倒れ伏す。
「はあ…はあ…勝った」
『本当に勝ったんだ！』

「はあ…もう時間だよ」
エルンがそう呟くとエルンの元に魔法陣が形成されエルンは魔法陣に沈んでいく
「これで勝ったと思ったらダメだよ、はあ…あなた達のことは全ての神に知れ渡る。覚悟しときなさい」
そして、エルンは魔法陣に沈んだ。
蝉の鳴き声が耳に入ってくる。それで今が夏ということ思い出した。
「あっつう、汗だくだ～
……まあとりあえず終わったな」

そう言いながら町の景色を眺める。
『やっぱり綺麗だな～いつ見ても…本当にきれい』
今までに見た中で一番綺麗かもしれない。

「さてとそろそろ元に戻ろうぜ、疲れたし寝たいんだよ」
『ああ～それなんだけど～』と守が口籠もる。
「なんだよ、早く戻ろ…『戻れないんだ』え？！」
戻れないってことは女の姿で暮らすということに…

「ぐあああああああ！
俺の男の勲、チ〇コは元に戻らないのか！」
『ちょっ普通にそんなこと言わないでよ！変態』
守の言葉に激怒したのか目を最大限に開け、「女には分からないだろうなあ！あれを亡くすということは一流企業の社長が突然ニートになるぐらいの絶望なんだよ」と叫んだ。

『うう～～、ちゃんと元に戻る方法を考えるから』
「え、戻れんの？それを先に言えよ」舞久は安堵した。
『でも、この町からは、離れないといけないけど…』「ああ、分かってる。」

『じゃあ、帰ろう。』
そして、舞久は歩きだした依然と蝉が鳴き、入道雲が浮いていて典型的な夏のイメージを具現している。
「うるせえな、蝉は」
だが今は、蝉の声を不快には思わなかった。

女になった男（後書き）

やっと漫画でいうと1話が終りました。これからもっとまとめられるように頑張りたいと思います。これからもよろしくお願いします。

子無舞というキャラ作り（前書き）

感想お願いします

子無舞というキャラ作り

俺の男の勲章がなくなり
１日が経った。
昨日疲れすぎて家に帰ってベッドにインした。
おかげで汗臭い。なので
風呂に入ろうとした。
だがそこで俺は自分の体が女であることを思い出した。
最初は戸惑った。そりゃ俺も一応理性がある。
そんな変態的行為には決して走らない。俺を甘く見るな。だが風呂に入りたいという欲望は止まらない。
そこで俺は決断した。

「そうだ。風呂に入ろう。」
『ダメ～～～～～～～～』そこで俺の意識が途絶えた
――――――――――――

目が覚めたら、眠っていただがさっきとは、明らかに違うのは体からすごいいい匂いがした。
『起きた？』「ああ、それよりお前が体洗ったのか？」『そうだよ！舞が変態の架け橋を昇ろうとしたから』「俺は変態じゃないしそれに舞って呼ぶな。まじで女じゃないか」
『何言ってんの？今日から舞久は子無舞として生活するんだよ』
「へ～すげー頑張ってね」『舞ちゃんはこれから神と闘うために訓練する学校に通うからね。』
何言ってんの？この子　医者も逃げ出すレベルだよ

『現実逃避しても無駄、そこには、元に戻る方法があるかもしんないのになあ～』
「守様いえ女王我に何なりと」

『あなたには学校に通う前にある特訓をしてもらうわ』

『女の子のお話練習〜♪』

――――――――

鏡の前に立っているのは

白髪の美少女　子無舞

「さてお前が好む女のイメージは？」

『う〜ん、舞が好きなのでいいよ』

じゃあまずは、上から目線のポーズをとり

「別にあんたのために作ったんじゃないんだからね」『何で、ツンデレなの。わたしそんなのいや』

う〜ん、じゃあ

「お風呂にする？ご飯にする？それともわ・た・し」『いやだ。もっと清楚な感じがいい』

じゃあ、

「あなた達、早く登校しなさい。」

『う〜ん、まあまあね。』生徒会長みたいな感じか…

「では、このような話し方でいいのですか？」

『うん、そんな感じ

やればできるじゃない！』

そして子無舞のキャラができあがった。

だが舞久は分かった。

というか自覚した。

「俺は変態なんだ。現在進行形で変態ｉｎｇしてる。」『それは前から』

誰か打開策があるなら

俺に教えてくれ！

子無舞というキャラ作り（後書き）

次回セミナリオの意味が判明　ヒントはフランシスコ・ザビエル
日本史ができる人ならわかるでしょう。
それではこれからもお願いします

第一章―そうだ。京都に行こう（前書き）

学園編が始まります。

第一章―そうだ。京都に行こう

現在俺は京都に行くために電車に乗っている。
なぜ電車に乗っているのかそれは、学校が京都にあるからだ。その学校名はセミナリオ、日本語で神学校という。セミナリオでは魔法は必修科目らしい。まあ普通に国語や数学等の教科も勉強する。そして、やはりランク付けがなされている。能力値をランクに表し、クラス分けするんだろう。セミナリオの概要は分かったし後は学校に着いてからにいろいろ聞くか。
それより、今日早く起きてまだ眠いし京都に着くまで寝ておこう。

――――――――――

京都

「やっと着いたな。修学旅行ぶりか」
『京都タワーだ。東京タワーよりはちっさいね』
京都タワーが小さいのは、京都の景観を損わないようにするために景観法が作られたから小さいんだ。
『ほ～う、そういうこと、まあ神社とか寺がいっぱいあるからね。』
余談している間に京都駅のバスターミナルでバスに乗り、かの有名な平安神宮に行った。平安神宮には赤い鳥居がある。その鳥居がセミナリオの門らしい。

バスに数十分経ち、平安神宮の赤い鳥居の前のバス停に着き、バスから降りる。
「これがセミナリオの門」『舞行こう』

そして、半信半疑ながらも鳥居をくぐった。
すると、さっきまで日本風の景色が広がっていたのに目の前には、

ヨーロッパ風の景色が広がっている。正面にすごいでかい建物がある。多分あれが学校だろう周りにもいくつかの建物があり、人が出入りしている『まずは、職員室に行きましょ』「そうだな」
『ダメ、ここでは、もう女言葉よ』
「ごめんなさい。気を付けるわ」
そして、学校に入る。
（学校に入るまでに通りすがりの人達にチラチラ見られた）正門の受付で転校生という証明証をもらい、
「職員室に行って担当になる先生に証明証を渡して下さい」と受付の女の人が言った。「はい、分かりました」「では、学校にお入りください」そして、学校に入り案内板を見て職員室に向かった。
すると、職員室の前の椅子に女の人が座っていた。
黒髪でスーツを着ている。女の人は、こちらを向き、「子無舞、日本人、能力値は、これは驚いた。ＫＩＮＧか」ここで説明、能力値は５つにわかれ、ＴＥＮＴＨ　ＪＡＣＫ　ＱＵＥＥＮ　ＫＩＮＧＡＣＥと名付けられている。そして俺は、ＫＩＮＧか。
「はじめまして。お前の担任の神野麗だ。よろしく」「あ、はいよろしくお願いします」
神野（かみや）先生はそういうと
キーンコーンカーン
鐘が鳴り、「おっと、早く行こう。生徒達が待ってる」と言って歩きだし、エレベーターに乗った。
エレベーターの中では無言重い空気が流れたがふと、疑問に思った。
「あの先生、どうやってわたくしの能力値を測ったんですか？」
「ん、受付のところでだが」あそこか…「まあ証明証が能力値を判定する」と言って俺から証明証を取り掲げた。そこには、ＫＩＮＧと書かれていた。
エレベーターから降り廊下を歩き、教室の前を通過する。７組　６組　５組の前に立ち止まった。

「ここがお前のクラスだ、私が入れと言ったら、入ってこい」と言いながら
ドアを開けて、
「席に付け～……ええっと今日は転校生が来ている。まあまあ特殊なやつだがな」おい聞こえてるぞ、特殊ってなんだ。
「入れ」
俺は深呼吸し・ドアを開けた。クラスは３０人くらいいる。クラス全員がこっちを向き、少し戸惑うが今俺は子無舞、こんなことでひるまない。そのまま、教壇に立ち、自己紹介した。

「わたくしの名は子無舞です。趣味はアニメ鑑賞とスポーツ　能力値はＫＩＮＧよ！」
クラス全員が驚愕していた。

「もしかしてまちがった？」『スリーアウト、チェンジ』守の呆れた声が俺の心を侵食した。

特殊な転校生（前書き）

人物の名前を決めるのは難しい

特殊な転校生

男は完全に間違ったと思った。誰がどう見てもこの殺伐とした光景をみればそう思う。そして俺がもう1回教室に入る所からやり直そうと決意した時
一番後ろにいるオレンジの髪の陽気そうな男が
「子無って苗字に神の言がねえじゃねえか」
どうやら、俺の苗字に驚愕していたようだ。
確かに能力を引き継げるのは必ず苗字に神の言があるものだけだ。
つまり、俺の存在は今までの常識を覆すことになる。

「だから、言っただろう。特殊だと」「いや…でも」と一番前の席にいるクリーム色の髪をポニーテールに束ねた女子が何か言おうとしたが「では、子無はあそこの真ん中の席に座れ」と言われ俺は席に着席した。
「じゃあ、お前ら仲良くしろよ。そして切磋琢磨しろ。」と言って先生は教室を後にする。それと同時に一斉に俺の席に１０人くらいの女子が集まった。

「子無さんて神の言がないのにＫＩＮＧクラスってすごいね」「そんなことないよ、あと舞でいいよ」よし、これで親近感を持ってもらえる。「でも子無って苗字珍しいね」「白髪なんて初めてみるよ」と矢継ぎ早に質問され、疲れた。

少し落ち着くと
２人の男子が近寄って来た。「よう、俺神民滝人っていうんだ。ランクはＫＩＮＧだ」とさっきのオレンジ髪の陽気そうな男が言い「そして僕が神東時彦（かんどう）だ。ランクは同様にＫＩＮＧよろしく」と眼鏡を掛け博識そうな雰囲気を醸し出しながら言った。

「よろしくですわ」
と言ったがふとなんでわざわざ女子に自己紹介してくるんだ？と思ったがすぐに理由が判明した。
「僕はクラスの代表でね。先生に学校を案内してやってくれたと頼まれたんだ」と時彦がめんどくさそうに言い「それで俺が副代表なんだ」と滝人が笑いながら言った。
「それで昼休みに学校を案内するから覚えておいてくれ」と時彦が眼鏡の位置を直しながら言った時
「私達も行く～」と言いながら3人の女子が近づいてきた。
一人はさっきのクリーム色の髪をポニーテールに束ねた子、そして背が低く少し童顔のピンクの髪をおさげにしている子に制服じゃなくてコスプレの服を着ている銀髪の子がやって来て
上の順に自己紹介して行く
「私は神茂空理（かみもくうり）です。ランクはQUEENです」と空理が言い
「そして私が鳴神社（なるかみやしろ）。ランクはなんとACEなのだ」と小さい胸を張りながら言い「最後に我が九神夜音（ここのかみやいん）だ。ランクはKING」と自己紹介が終り、空理が遠慮がちに
「私達も一緒に良いですか？」と時彦に聞き「女子がいた方が安心だ」と承諾した。

そのあとはとりとめのない話しをして授業開始のチャイムが鳴った。

――――――――――――

通常授業（国語や数学等）はまだ大丈夫だったが
魔法が意味不明

魔法にはジャンルがあり
攻撃魔法　防御魔法　回復魔法　環境魔法　移動魔法そして拘束魔法がある。
もっと細かく分類されるがこれが大幅なジャンル分けだ。今日の授

業では攻撃魔法の基礎知識を勉強していたが開始5分で現実逃避した。

――――――

昼休み

学校を案内してもらい今は闘技場にいる。

そして俺は初めて闘技場を見ていたから興奮していた「すごいわ！こんなの初めて見た」「そうか？そんなに驚くことでもないだろう」と時彦が若干引きながら言った。すると、社が
「じゃあそろそろはじめまよう！」といい闘技場から出ていく。他の皆も出ていく中で時彦が「子無お前は残れ」と少し真剣な表情で言った。

「えっといまから何を？」と舞が聞いた。
そして時彦が
「召喚　承認」といい
両手にハンドガンを握り、銃口を俺に向け、
「力試しだ」
時彦は引き金を引いた。

誇りを胸に（前書き）

お読みください

誇りを胸に

ドオン

時彦の射撃した銃弾が舞の後ろで爆発した。

「ほおう、避けたか、少し移動魔法で弾の速度を上昇させたんだがな」時彦が弾を装填させながら言った。「いきなり何をするんですか？」「クラス代表にはある権利が与えられる。それは交戦権だ。代表は双方の同意を得ずとも交戦できる。だがそれには理由が必要なんだ」と銃を指でまわしながら話し続ける。

「理由は　何？」

時彦は笑いながら

「お前が本当にＫＩＮＧクラスか確かめるためだ。」

くそっめんどくさいな

『でも、あれじゃ引き下がらないよ』

戦うしかないか

守、武器貸してくれ

『はいは～い、じゃあ

刀　出すね』

「いいわよ、戦うわ」

そして、魔方陣が出現し刀が現れる。

「日本刀か…てっきり槍とかだと思ったが」と時彦がいい同時に銃口が再び舞に向けられる。

「さてハンデはなしだ。お前が魔法を使えなくとも、全力で行くぞ。まあ、１０秒で終わるがな」

「ん…来なさい」

―――――――――
観客席

そこで滝人　空理　社　夜音が眺めていた。
すると、社が
「舞が負けるね。絶対に」そして　滝人が
「ああ、そうだな　例え同じＫＩＮＧクラスでも魔法の扱い方で変わっていく」
「例えるなら、どれほど性能のいいＰＣを持っていてもＰＣの基本技術がなければ
意味がない」と夜音が頷きながら言う。「そうだね。でも、どうかな…」と空理が言う。

「まあ舞が負けるのは確定だけど、どれだけ持ち堪えられるかな～」
と社が怪しげに微笑んだ。

―――――――――
闘技場

「では、戦闘を…」
時彦がトリガーに指をかけ舞は態勢を低くする。
そして
「開始する」
時彦の開始の言葉とともに時彦がトリガーを引く
「避けられるかな」
「な…」
ドゥァァ
さっきの魔法弾の５倍の速度と威力で舞に突撃した。
「さっき、お前と会話している間銃を指で回転してただろう。あれは、癖でもなんでもない。あの時に移動魔法と攻撃魔法をかけた。

まあ、気付かなくて当然だ。魔方陣を形成させず魔法を発動したからな。避けるのは難しいだろいな」
時彦は魔法の技術では上位にいる。魔方陣を形成せずに魔法を撃つことはサッカーでいうとゴールキーパーが相手ゴールにシュートを入れるぐらいに難易度が高い。

「うるさいわね…女の子に手加減できないの」
頭から血を流しながら言った。その光景に時彦は一瞬動揺したが笑いながら
「防御魔法なしで防ぐとは末恐ろしいが、勝負は決した。僕の勝ちだ。」と言い銃をしまおうとするが、

「まだ…はあ…終わって…ない！」舞は、刀を強く握る。『舞！ダメだよ！無理しないで、魔法が使えないんだったら仕方ないよ！」悪いな守、男には譲れない誇りが、あるんだ。

「まだ戦う気か…まあその覚悟だけは評価しよう。だがお前は僕より弱い、つまり僕には勝てない。分かるだろう」時彦の言葉に舞は微笑んみ、「確かに私は弱い。でもみすみす負けを認めるような脆弱な心は持ち合わせていない」舞もとい舞久は死んだ父に昔教えてもらったことがある。
《人が負けを認める時は誇りを汚すことだ。だから、どれだけ傷を負っても誇りを胸に戦え》剣道をしていた父の教えだ。
舞久は今でもその教えを守っている。だから、
「俺は！」　　剣を構え、イメージする。さっきの時彦の射撃した弾にかけた移動魔法を速く、素早く動く自分を
「誇りを胸に戦い続ける！」舞の言葉に「な…！？」時彦が怯んでいる間に

「あなたの移動魔法、参考にさせていただきましたわ」
舞は瞬時に時彦の後ろに周り、刀を斬り付けた。
だが
キンッ
「な…」「防御魔法を展開した。少し驚いたが、無陣法で魔法を使える僕には効かない」
時彦は舞に向け射撃する。「ぐっ　、くそ」
舞は血を出しながら倒れ伏す。
「子無舞か…何者なんだ。さっきの男勝りな言葉も何かあるな」時彦が戦闘の余韻に浸っている。静かになった闘技場まで今まできずかなかった野次馬の声が響き渡っていた。

決意と不安（前書き）

お読みください

決意と不安

目が覚めたら保健室にいた。もう外は暗闇に包まれている。闘技場で戦っていたのは昼だからおよそ6時間ぐらい寝ていたことになる。体の傷は治っている。回復魔法で治癒したのだろうと俺が状況整理していると『舞、もう大丈夫？』と守が話してきた。

「ああ、大丈夫だ。」

と俺が言うと、『そう、ならいいよ』と安心しながら『でも！舞？あなた男言葉で叫んだでしょ！』

「感情が高ぶったんだよ。次からは気をつける」確かにあの時はちょっとヤバかったな……『あのさ舞さ、あの時お父さんのこと思い出してたでしょ』「ん…はあ…なんでも見えるんだな…確かにあの時父さんの言葉を思い出した。もう今はいないけど…」『凄く恐かったけど優しい人だったね…』「ああ…」と切ないムードが漂っている時

カーテンが開かれ

「おっつ～～～～♪やっと起きたね」と社が子供のような無垢な笑顔で言って来たその後俺の横にある椅子に座った。「いろいろ聞きたい事があるんだけど、今はひとまずホテルに行こう。そこが生徒達が暮らす寮だから」と言い終わった後椅子から立ち俺が立つのを促す。「早く行こ　私達同じ部屋だから」「えっそうなの？」「うん、まあ4人部屋で空理と夜音もいるから、皆待ってるよ！」と舞の手を引きながら、ホテルに向かった。

――――――――

ホテル

舞が泊まる部屋は１５１７号室

部屋に入るとまず女子独特の甘い匂いが鼻腔をくすぐる。社に背中を押され入るとパリのホテルのようなデザインをしている部屋が広がっている。広さは教室ぐらいある。ベッドが４つあり、画面の大きい液晶テレビが設置されている。その他にシャワー室　キッチン　と最低限の設備がある。

ベッドには空理と夜音が乗っていて、こちらにきずいたのか寄って来て

「お疲れ様です。大丈夫でしたか？」「うん、大丈夫よ！」と空理が聞いてきたので軽く応対した。

「しかし、神東は女子にも容赦ないな」と夜音が同情して言ったが

「ううん、手加減はしてたと思う」俺が戦ってたんだ。あいつが手加減してたのなんてすぐに分かる。「私、もっと強くならなきゃ」俺が決意した時「魔法教えてあげてもいいよ！」と社が少ない胸を張りながら言う。確か社はＡＣＥランクだ。全然強く見えないというか小さいから子供にしか見えない

「今変なこと考えたでしょ」と社が頬を膨らまして言う。「ううん、ただやっぱり頼りになるな、社は～と思ってね」と舞が言い「でしょ！私は頼りがいのあるお姉さんなのだ」と社がご満悦にいうが皆

「それはない」と思っている。

だが社に教えてもらった方が授業より効率がいい。

「それでいつから「その前に！」と社が叫ぶ。

「私、さっき舞に聞きたい事があるって言ったよね？」「うん、確かに」

「あのさ私が聞きたいのは～」と社がドアの方にいき鍵をかける。

俺はいやな予感しかしなかった。そして、案の定予想は当たった。

「舞は～男だよね？」

社は奇妙に笑い、ゆっくりと近づいてきた。

子無舞の正体（前書き）

お読みください

子無舞の正体

俺は呆然とした。
がすぐに弁明する。
「男って何その冗談？私は胸もある、完璧な女よ！」「嘘だね」社は一歩も譲る気は無いみたいだ。
俺は社を説得するため
空理と夜音に助けを求める「空理も夜音も何か言って！」だが「それは無理だ。ああなっては論破するしか方法がない」と断られる。
くそっどうする！おい、守！
『もう終わった、もう終わった、もう終わった』
壊れてるな…

仕方ない、論破するか。
「私がなんで男だと思ったの？」まずは根拠を聞かないとな。
「闘技場での男言葉」
やっぱりな…「それだけで私が男だとでも思ったの？」社はベッドに座り、「そんな分けないじゃん」と言った。
「これからは話しが長くなるんだけど～」と言い社の論破が始まる。

「まず私は観客席を後にして、すぐに神東君の所に行った。そして、あなたのことどう思うって聞いたら「怪しすぎる。だから少し探ろうと思う。鳴神、お前来るか？」って言われたから行く～て言ったの。てっきり図書館とかいくのかな～って思ったらなんと地下の指令部に来たんだけど、指令部は職員と各クラス代表そして、生徒会長しか入れない。そのまま神東君が入ったから、私が外で待ってたら、一枚の紙を持って出てきてさ神東君に聞いたら「これを見てくれ」って言われたから見たら、名前がいっぱい書かれてた。そしたら赤い文字で書かれた名前があった。その紙は1日に神軍に招集さ

れた人達の名前が記されたもので、赤い文字は、まだ招集されていないという証拠、指令部でも話題になってるって神東が言ってたわ。そしてその赤字で書かれた名前は、子無舞久」「あ…」と空理が俺を見る。

「そして、神東君が推理したわ。「まず僕からの見解を言おう。子無舞は融合した結果、形成された人間だ。通常、融合は同じ能力値の者達が成功できる魔法だ。だがそれでも双方の魔法技術が相当なものではなかったら成功率は低下する。この子無舞久は、女と融合したが同等の能力値ではなかったため体は女になり、おそらく、精神は完全に子無が乗っ取っている。今日の朝からだが、子無の一人称はわたくしから私(わたし)に変わっている。多分、まだ女に馴れていないのだろうな。つまり、子無舞は、子無舞久と謎の女の融合体だ」とね。どう子無舞、いや子無舞久君。」

全問正解だ。というか神東はコナンか。頭きれすぎだろ。

『もう言っていいよ。本当の事』…分かった。

守が覚悟して、俺も決意する。そして、

「そうだ。俺は子無舞久だ。そして、俺の中にいるのが神瀬川守だ」と告白した

「嘘…本当?」と空理が聞こえ「ああ、本当だ。」

と受け応え、「興味深いな」と夜音は手をワナワナ動かしながら言った。

「素直に答えてくれるとは思わなかったな〜」

「お前相手には隠せないと思ったんだ」と舞久は頭を掻きながら言った。

すると、『一つ聞いて欲しいことがあるんだけど、神軍から抜け出した人間がセミナリオにいて良いのか聞いて』と言われ舞久が

「もし神軍から抜け出した人間がセミナリオにいたらどうなる」その質問に社は少し間を開け「過去に例がないけど、大丈夫よ。ちゃんと保護してくれるから安心して」と社は俺じゃない人に語り掛けるように優しく答えた。

『よかった。なら安心だよ』そうか、守はこのことが心配で、ずっと、ばれないようにしてくれと言っていたのか。

「ふあ～っ、なんか眠くなってきたな」欠伸しながら時計を見ると23時になっていた。「風呂に入るか」と言ったが「大浴場はもうとっくに閉まってる」と夜音が言った。

そうなると部屋に設備されているシャワー室を使うことになる。

「じゃあシャワー室で…」と舞久が言うと「でも、舞はどうするの、シャワーを浴びるとなると、その…」と空理が口籠もる。

空理が何を言いたいのかはよく分かる。多分、他の2人も分かっている。

俺が悩んでいると

社がとんでもないことを言い出した。

「皆で入ろうよ」と、

そして、一緒に入ることになったが俺だけは目隠しと口止めの魔法（拘束魔法）を掛けられた。

なぜ俺の耳にも拘束魔法を掛けないのかは知らないがおかげでいい気分だ。

『変態がいるよ！ここに変態がいるよ』ちょっお前、変態じゃないぞ、俺は理性という魔法を掛けている。円周率を数えてな。

円周率を数えているうちに俺の体は洗い終え、先に風呂から上がった。
円周率を覚えていて良かったと思いながら、ベッドに横たわり、そのまま眠ってしまった。

社　夜音　空理も風呂から上がり、寝る準備をした。

「もう舞は寝てしまったな」といいながら布団を掛ける。「女の子のこと教えてあげないとね」と空理が微笑みながら言った。
「まあ明日も頑張ろう！」と社が言い、眠りに落ちた

生徒会長との対面（前書き）

投稿が遅れました。

生徒会長との対面

翌朝、目が覚めると視界に社の満面の笑みが視界に入った。そして、社が「かわゆい顔して寝てたね～だから一緒に寝てもうた～」と抱きついてきた。「ちょっとおいやめろ！」と舞久が頬を赤く染めながら解こうとしたが社は離れない。
どうしたらいいか考えていたら、「舞、社ちゃん早く朝食食べに行こ！」と空理が少し怒りながら言って来たので素直に食べに行く準備をした。
どうやら、俺が起きるのが遅くて、社が起こしに来たが社が戻って来ないから空理が来たみたいだ。

その後制服に着替え、社達とエレベーターに乗り、最上階の食堂に行く。エレベーターは全面透明ガラスでできている。そのため、学校の風景が一望できる。俺と神東が戦った闘技場や青いドームの訓練場と最上階に行くにつれ、建物は小さくなる。一応説明しておくと最上階は５０階ある。相当高い。
風景を眺めているとずっと向こうに海が見えた。俺は疑問に思ったがエレベーターが最上階に着いたようだ。
エレベーターから降りると生徒達がちらほらいた。来るのが早かったようだ。

食券を注文する。社、空理、夜音はそれぞれサンドイッチを注文する。俺は和風定食だ。そして、カウンターで受け取り、６人テーブルに座る。
「なんで、３人共サンドイッチなんだ？」「今日はサンドイッチの日だからだ」と夜音が当たり前のように応える。
「周りを見てみろ、全員サンドイッチを食べてるだろ？」「えっ本当？」と周りを見たが誰もサンドイッチを食べていない。

「嘘だ」「てめえ…」
ちょっと信じちゃったじゃねえか…

「よう、座るぜ！」
「失礼、座らしてもらう」滝人と時彦が一緒に食べ始めた。
「あの…それは」
「ん…なんだよ？サンドイッチ食ってるだけだろ」
俺は滝人に、「……今日は何の日？」と聞いたら「サンドイッチの日だろ。当たり前だ」
滝人は平然と応えた。
マジか。こいつら…

「ところで、子無は後で一緒に来い。行くところがある」と時彦が朝カレーを食いながら言った。
「分かったよ。まあ何かしらのイベントは起こると思ってたからな」
「それでどこにいくの？」と社が聞き、それに対し「生徒会長室だ…」と時彦が俺を同情の眼差しで見る。社も「うわ～最悪だ」と言う。
いや予感しかしないな…

朝食を食べ終わり、俺と時彦は生徒会室に向かった。
生徒会室に向かう中、俺は少し警戒していた。もしかしたら昨日みたいに戦うことになると思ったからだ。だが、「安心しろ、生徒会長と戦闘になることはまずない、彼女はむやみに戦うことはしないからな」
と時彦は俺の気持ちを見透かしたように言う。
「そうか、良かったよ」
「そんなことより男言葉で話して良いのか、通りすがりに聞こえたらどうする？」「別に、臨機応変に対応するさ」「そうか……お、着いたな」

「これが生徒会室？」
それは、どこからどう見ても魔女の家の扉だ。取っ手には髑髏が着いていて、少しというかもの凄く不気味だ。
「さて、僕は教室に行く。後は生徒会長が案内するだろう…幸運を祈る」
「ちょっおま…行っちまった」時彦は移動魔法で一瞬で消えた。
「どんだけいやなんだよ、生徒会長嫌われすぎだろ」
だが、生徒会長には会わないといけない。まあ女性らしいからな、優しいだろ。
コンコン
「1年の子無舞です」
「どうぞ、入って」
お、女らしい優しい声だ。「分かりました。失礼します」高校の面接のように堅苦しい口調で受け答えする
生徒会室に入り、生徒会長の姿が視界に入るはず、だった。
ベチャッ
顔に物凄い勢いで何かが当たる。仄かに甘い匂いがする。これはパイだ。
よくお笑い番組でやってるあれ。
俺が放心状態になっていると前から「やった！顔面ジャストミートだ」と歓喜の声が聞こえる。
「なんで、こうなるの？」俺は立ち尽くし、無意識に呟いた。

生徒会長との対面（後書き）

生徒会長、登場

生徒会長との対面２

あれ？なんだろ…
無性に腹立つな、
「ほら！立ち止まってないで中に入って来て！」
「いや、あのパイのせいで前が見えないので何か拭うものないですか？」
「ほら！早く入って来て！」「あのだから拭うものを…」「早く入って来て！」俺のフラストレーションは頂点に達した。
「前が見えねえから、入れねえんだよ！！ボケが！」俺は前にいるであろう女に蹴りを放った。だが人間を蹴った感触がなかった、そのかわり　カチッ　何かのスイッチを蹴ってしまった。それと同時に　ザバア～
天井から大量の水が降ってきた。
「キャハハハハハ、爆笑！面白すぎ！」
萎えた…テンションが地底まで打だ下がりだ。俺、明日から地底人として暮らすと言われた時のテンションの低さだ。言われたことないけど。

水のおかげでパイが流れ落ちる。視界が開け、目の前を確認するとそこには、髪の色が紺色の癖毛、到底生徒会長には見えない佇まいだが服装が特殊すぎる。
「メイド服だと…しかも完璧な絶対領域だ」
確かに生徒会長のスタイルはかなりの物だ。締まるところは締まり出るところは出ている。そして、絶対領域（ガーターからスカートの間）はもしオタクが見たら、崇めるぐらいのレベルだ。
「フフ、君が噂の融合体だね！リアクションが面白すぎ！これは有望な人材だわ」「あの…融合体って言うのはちょっと…」「ん、そうね、今は子無舞ちゃんだもんね！」と会長との初会話を果たす、

なんで皆生徒室を避けるのか分かった気がする。
「あっそうだ！自己紹介がまだだった、私の名前は代々神照（よよがみてる）、能力値はＡＣＥ、そして生徒会会長です」
いつも思うが苗字に神が着いてたら凄いカッコいい感じになるな。かといって子無とか！なんだよ、どうやったらこんな苗字が生まれんだよ！
「ハックチュン　あ～寒い　代々神会長、着替えとかないですか？」暦では夏の季節であり、当然部屋にはクーラーがついている。水びたしになった（代々神会長のせい）舞久にとって悪環境でしかない。
「可愛いくしゃみするね、ますます男のあなたを見てみたくなったわ…はい着替えよ！」舞久は着替えを受け取るがあからさまに嫌な顔をする。「あの…これメイド服じゃないですか？制服の着替えは…」「この部屋にはメイド服しかないよ」「ですよね～ってメイド服しかないんですか？」
すると、照は怪訝に笑い
「ごめんね！制服の着替えはないのよ」とわざと芝居がかった風に言った。
「もしかしてあなた、俺にメイド服を着させるために」「ち、違うよ！違うからね！」嘘が下手すぎる。動揺しすぎだし…まあそこが彼女の良いところだろう。「分かりました。着させていただきます」
「やった～！」舞久は照の歓喜の声を背に浴びながら、試着室に入った。

５分後　メイド服に着替え終わる。鏡の前に立ってみると、小悪魔的な黒のフリフリが特徴のメイド服を着た少女が立っている。
「かわいいな…」
鏡に映った顔が笑っている。頬を少し赤らめて
「着替えた？早く出てきてよ！」「はい、ただいま」舞久はカーテンを開けた。「お～わ～、可愛いよ！よく似合ってるわ！やはり有

望な人材だわ！」「あ～そうだな、よく似合っている。」「そうですか…えっ
なんで神野先生が？」
舞久は少し戸惑い、急に赤面した。
「ははっまあそう恥ずかしがるな、まあ私がここに来たのはお前達と一緒に指令部に行くためだ」
神野がそう言うと、扉を開いた。
「何をしに行くんですか？」舞久の質問に神野が
「お前の中にいる女と会話しに行く」

「え？

謎の妹

学校の地下に臨時通信指令部がある。通常、本元の通信指令部であらゆる指示が出される。いわば、国会のようなものだ。もし通信指令部が倒壊してしまうとセミナリオは消え去る。そのため、学校の地下に臨時通信指令部を設けた。
臨時通信指令部には本元の通信指令部よりは設備が整っていないが旧研究室が存在する。現在は新しい研究室ができているため旧研究室は誰にも使われていない。そして今舞久、照、神野は旧研究室にいる。

「そこに座ってくれ」
神野の指示で舞久は赤い椅子に座る。「今から、お前の精神を体から乖離させる。このヘルメットをかぶってくれ」舞久はヘルメットをかぶり、目をつぶる。
神野がキーボードを叩く音が聞こえる。しだいに耳鳴りが聞こえだし脳の中に《乖離します》と響き、次の瞬間に俺の精神は途絶した
《乖離成功、身体的障害なし、システム制御に移行》投影ディスプレイに様々な波計が出現する。
《ＡＮＯＴＨＥＲ》という文字が現れる。

神野がマイクに向かって
「聞こえるか？子無舞の体の持ち主」『はい、聞こえます』「まず君の名前は？」「神瀬川守です、１６歳です」「では守、君は神軍に招集されたが戻ってきた、それで間違いないな？」「はい」「どうやって戻ってきたんだ？」神野が少し身を乗り出して聞く。
「神軍に招集される前に臨時に収容される施設があります。私はそこに収容されました」「招集先の神の名は分かるか？」「たしかアルデウスだったかな」「比較的温厚な神だな…続けてくれ」「はい、

そして収容所に入り、ずっと待っていました。その間周りにいる人が悲鳴を上げながら、泣いていました。次第に時間感覚がなくなり出した頃、収容所が慌しくなったので息を殺して聞くと、
「神の言がないのに、能力を維持したやつが現れた。名は子無舞久だと言っていた」私は迷うことなく、帰世権を使い、こちらの世界に来ました」「ふん、驚いたな。お前が収容された施設は精神を砕き、逃げる意欲を失わせる心理魔法が掛けられている。その中でよく戻って来たな」「そ、そんな…」守が謙遜すると照が守に「私達も元に戻れるよう協力するわ」と言う。「はい、ありがとうございます…あと舞久に聞いて欲しいことがあるんです」
「なんだ？」神野が聞く。「――――――――――――と聞いといてくれませんか。私は怖くて聞けないんです。お願いします」神野は少し戸惑うが「分かった。聞いておく…さて、もう遮断するがいいか」「はい、ありがとうございました」そして、守との会話が遮断され、同時に「つう～頭が痛い」と舞久の声がした。
「子無、頭の痛みが引いたら職員室に来い」
そう言って神野は研究室を後にする。
照もそれに付いていき「じゃあね」と手を振り、出ていった。

頭の痛みが治まり、職員室に向かう。「失礼します」と言い職員室に入り、神野の席に向かう。
神野は舞久に向き直り、
「お前に妹はいるか？」と聞いてきた。「いや、妹はいないですけど」「本当か？嘘じゃないな？」「本当ですよ」「そうか、ならいい」と言いながら、着替えの制服を受け取る。「早く生徒会室に行って着替えて来い」舞久は安堵し、
「ありがとうございます！」と言って職員室から出ていった。

「嘘はついていないな」
先ほど、守に舞久に聞いて欲しいことがあると頼まれていた。それ

は「舞久に妹がいるか聞いて欲しい」とのことだった。が、舞久は否定した。「もしかしたら…」と神野の脳に最悪の状況が過るが、すぐに消去し、「まあなるようになるだろうな」と神野は呟いた。

――――――――

舞久が生徒会長室に向かっている。移動魔法で瞬間的な速度を出しながら。

そして、案の定すぐに生徒会長室に着いた。

ドアをノックして、中に入ると生徒会室に入ると

ベチャッ

また、パイが舞久の顔を直撃する。

「だから、なんでこーなるの？」舞久のテンションが極限まで低下した。

生徒会書記（前書き）

補講はきつい

生徒会書記

訓練場とは生徒達が自ら特訓するために設けられた場である。あらゆるシミュレーションで演習ができるシステムがあり、能力向上にはもってこいの場である。そして、現在訓練場に2人の少女が修業している。

――――――――――

魔法によってあらゆる壁が無惨に壊れている。訓練場内では一定時間に修復魔法が発動しているがそれも間に合わない状況だ。

「違う！もっと滑らかに魔法陣を形成させなきゃ！」「無理だ、どうしても遅れちまう」今は舞久が社との契約より特訓してもらっている。舞久はすぐに基礎魔法を完璧にこなせるようになり、応用に取り掛かっていた。属性連陣魔法はその名のとおり、あらゆる属性の魔法陣を形成し、連続的に攻撃する応用技術を要する魔法だ。だが形成に失敗すれば、最悪の事態をまねく。単純に見えて、リスクの高い魔法である。

「やっぱり俺は重複魔法がやりやすい」と言って舞久は前に手を出し、魔法陣を形成する。だが魔法陣は1枚しかない。だが舞久が手を開くと次の瞬間魔法陣が同じ焦点軸を5枚に魔法陣がスライドしていき、魔光線が放たれた。

「そうね、重複はできてるみたいだし、これでおしまいにしよっか、舞」「そうだな、社」そして、訓練場を後にする。ちなみにさっきの重複魔法の仕組みは5枚の魔法陣に威力、速度をを上げることのできる魔法陣を出し、それに通過させるように魔光線を放つ。属性連陣魔法とは少し違った仕組みだ。

今は夜の9時、大浴場はまだ開いている。

「私は大浴場に行くけど舞はどうする？」「俺は部屋のシャワーで浴びるから」「そう、まあまだ入ってる子もいるし、もし私と2人きりで入るとしたらどうしてた？」「シャワー」と舞久が即答する。社は少し拗ねながら大浴場に向かった。舞久も自室に向かうがふと思い出す。

「部屋の鍵訓練場に忘れてきたかも」と言って舞久は踵を返し、訓練場に向かう。

訓練場に入ると1人の生徒がいた。だがその生徒は神々しい雰囲気を纏い、異次元の存在に思える。

「誰や？」と関西弁を介して水色の髪を揺らしながら、こちらを振り返り質問してきた。

「子無舞ですが何か？」と応えると手をポンと叩き「お～君が子無ゆう子か。たしかにメイド服が似合いそうな風貌しとるな」メイド服という単語で舞久はある意地悪な女性の顔が浮かぶ。

「私は神都愛有（こうづあゆ）や、ランクはＡＣＥ、生徒会書記担当しとる」

愛有は自己紹介する。

舞久は愛有を一瞥し、「なんで着物何ですか？」と聞いた。さっき神々しく見えたのはこの着物のおかげだ

「着物が好きやからや！」「はあ、そうですか」

あまりにも単純な応えに舞久はたじろいだ。

がそこで当初の目的を思い出した。

「あの…ホテルの部屋の鍵落ちてませんでしたか」

舞久は愛有に聞き「これやろ」と鍵を舞久に見せた。だが舞久に渡そうとはしない。愛有は策士的に笑い

「私に勝ったら、渡したるわ」

愛有は右手に一瞬で武器を出した。弓矢だった。

「さあ、返して欲しいんやったら私に勝ち～」

愛有は完全に戦闘態勢に入る。舞久も日本刀を出し

「無理ゲーだろ、これ」
とは言いながら、舞久は先制攻撃を仕掛けた。
重複魔法を愛有に放つ。
だが一瞬で粉砕されるがその一瞬で移動魔法により愛有に斬り掛かる。遠距離の愛有に近距離は分が悪い。と舞久は判断していたが
「那須与一は扇の的をうちつけた。それは殺那的な行動、そして、最初は射たれたことも気付かない」
愛有が関西弁なしで語る。そして、舞久の胸に指を差し、「だから射たれたことも気付かんやろ」
舞久の胸には一本の赤い矢が突き刺さっていた。

生徒会書記２

「なっいつの間に?!」
「最初から…」愛有の言葉に舞久は驚愕の表情を浮かべる。「とかゆう思ったか」「ん…どっちなんだよ?」愛有の言葉に舞久は少しうんざりする。すると、愛有は唇に指を当てながら、「どっちやと思う?最初かそれとも最中か?」愛有は舞久の応えを待つ。

もし最初からならまだ納得はできる。それができるほどの技術があるということで片付けられるからだ。だが戦闘の最中となると別だ。俺は重複魔法で迎撃し少しの隙に斬りつけた。この間に攻撃をする隙は微塵もない。となると、あれしかない。

舞久は胸に刺さっている矢に触れる。すると矢は無惨し消え去る。
「この矢は幻覚だ」
「うん、正解や、まあ幻覚を掛けたんは君が斬り掛かってきた時やけど…」
愛有は閑かに微笑み、
「今も君は幻覚を見てるんやで」「えっ?」
突如、舞久と愛有の体感距離が遠ざかる。さっきまでは１メートルぐらい間が空いていたが２０メートルぐらいまでに空いていた。
「幻覚魔法は相手に一寸の余地も与えたらあかん。怒濤のように仕掛けへんかったら相手の意識が追いつきおって幻覚魔法の効力が落ちてしまうんや。ホンマ難儀な魔法やで」と愛有はため息をつく。
確かに幻覚魔法は高度な技術が必要になってくる。それはどれだけ速く魔法を発動させられるかだ。
「生徒会に入るには、いくつか条件がある」と愛有は唐突に話し始める。
「まずは、応用魔法が使えること、と言っても第五応用魔法までだ

がな…次に必ず5つ以上の属性魔法が使えること、最後に詠唱魔法が使えることだ…そして、君には移動魔法の応用魔法を見せてやろう」とまた関西弁なしで話す。この人本当に関西人か？設定なんじゃね。と舞久が思っていると、愛有が視界から消える。舞久は刀を強く握り、警戒する。すると愛有が姿を現す。だが、愛有の姿がどんどん増えていく。影分身、今の現象に当てはまる言葉だ。
どんどん増大して数が１００人ぐらいになった時、愛有は矢を射る。およそ１００人が射た矢が舞久に放たれる。何も出来ない。防ぐことも、避けることも、叫ぶことも驚くこともできなかった。死んだ。と思った。
だが、舞久に矢があと数ミリで当たる寸前ですべての矢が霧散する。舞久はショックのあまりひざまづいた。
「びっくりしたんか？悪かったな」と舞久に近づいて来た。魔法はすでに解けている。
「うっ、ぐすっ」「ええっ？！泣いてるんか？」
俺何泣いてんだ。こんなんで泣くなんてまるで女みたいじゃ、って俺いま女だ。「ああ～悪かった。少しからかった、じゃなくてやな…」と愛有は困っていたが妙案を思いついた。「そうや！、修業なんや。恐怖があれば戦いにはならんからな」愛有は部屋のキーを舞久に渡した。「じゃあ！もう帰るわ。おおきに！」と言って訓練場から出ていった。訓練場に舞久だけが残った。
次第に涙が引いて立ち上がる。扉に向かいながら、「負けてらんねえ！」舞久はそう呟いた。

――――――――――

生徒会室

そこに生徒会会長：代々神照と舞久達のクラスの担任神野麗がいた。
２人はある一枚の紙を見ていた。
そこには、舞久によく似たあどけない女の子の顔写真がある。

「この子がそうなんですか？」「ああ、そうだ。この子が…子無の妹だ」

不安と不安と不安

セミナリオに入学して数週間が経った。少し前までは普通に暮らしていたがあれよあれよと変哲な生活になった。昔はマンガやゲームみたいな世界に入りたいと切に思っていたが精神年齢が上昇すると、三次元が二次元に介入できないとすっぱり諦めた。だが今は魔法やら神やらと特筆すべき出来事が起きた。
そして現在、大学受験生のようなモチベーションで頑張っていたら遂にあの日が迫っていた。あの日とはあれをあれしてあれする日だ。

――――――――

早朝
この頃、夜に特訓をしているから起きるのが億劫だ。だが、起きなければいけない理由がある。主に俺の体のために。

「舞！早く起きなさい朝御飯食べられないよ！」
空理がどこぞの母親のように舞久を起こす。
「まだ眠いから先に行っといて」「前もそういって遅刻したんでしょ！」
空理が布団を奪い、なんと鞭を出した。
「起きなかったら、思いっきり叩くよ、てへっ」
「ああ～今日もいい天気だ、本当に！」「カーテン閉まってるよ」
空理がジト目で睨みつける。
「歯磨きしてくる、待っといて」「うん、分かった。早くね」
空理のキャラってあんなんだっけ、もっと遠慮がちな感じだったはず…
朝食を食べ、そのまま教室に向かった。そのあと舞久はクラスの女子と談話し、鐘がなり着席する。

神野担任が豪勢に扉を開け教壇に上り、黒板に何か書き始めた。書き終えると前を向いた。
「今週末から林間学校が実施される」確かに黒板には綺麗な字体で林間学校と書かれている。
「林間学校では他クラスと合同で勉学に励むと建前ではそうなっている。林間学校ではある大会がおこなわれる。それが林間学校でメインとなるイベントだ。そしてその大会はグループを組み、指定されたエリア内で聖杯を探すという極簡単なルールだ」つまり、林間学校で聖杯戦争をするということだ。
すると、夜音が
「聖杯戦争か、響きがいい」と目を輝かせながら言った。どうやら、夜音も俺と同じことを考えていたようだ。
「で、いまからグループを決めてもらう。ただし、林間学校の斑じゃないからな、それは当日に発表する。今は大会グループを決めろ！人数は４、５人だ」一斉にクラス全員が立ち上がりグループを決め始める。舞久はすぐにグループを決めた。グループは舞久　社　夜音空理　滝人だ。
「あと言い忘れたがクラス代表は大会には参加しない。クラス代表はゴールで待つというシステムだ。まあクラス代表にもいくつか許可されていることがあるがまあそれは大会直前に言われるだろう」神野が説明してる間に全員グループを決めおわっていた。
「グループは決まったな！それではそのグループで大会に挑むことになる。健闘を」と言って神野は教室を後にした。
放課後、部活に行く者もいればホテルに行く者もいる。そして、舞久達は食堂にいた。
「林間学校の聖杯戦争ってどこで開催されんの？」
舞久にはそこが最大の疑問だ。「長野県だよ、あと聖杯戦争は北アルプスの山脈で開催されるんだよ」社が応えるが「山を登るのは苦

手だよ～、それも今は夏で北アルプスだよ、絶対しんどいよ」と愚痴を吐く。
滝人も「聖杯探す以前の問題だな」と言う。
作戦考えようと言って集まったはいいがただ愚痴をこぼしているだけだ。
「ふふん、お前達、何か忘れてはいないか？」と夜音が立ち上がり発言する。
「お前達、いや愚民ども」「言い換えんなよ」と舞久が突っこむ。
「我の故郷がどこにあるか覚えているか？」「黙れ、厨二病」とまた舞久が突っこむ。「覚えていないなら教えてやる。我の故郷は長野の北アルプス付近なのだ。クハハハハ」と高笑いする。そして全員が「「「「マジで」」」」と声が重なった。「マ・ジ・でだ！だから私は北アルプスの他南アルプスも中央アルプスも熟知している」本当みたいだ、いつも馬鹿みたいなコスプレしているこいつが山登りしていたとは金田一とコナンがタッグを組んでも迷宮入りしそうだ。
「良かった。山登り経験者で北アルプス付近に住んでたなんて夜音すごいよ！」「これが私の力だ！」
空理と夜音がはしゃいでいる。これで他のグループよりは有利に立てたはずだ。「じゃあ！作戦は山を登るってことで！」と社が締めくくりブリーフィングは終わった。「絶対優勝するぞー」と社　夜音　空理が叫ぶ。すると滝人が「なあ、舞久」と男の俺の名前を呼び「何も解決してなくね？」と3人を見ながら言った。

そして、ついに
林間学校が幕を開ける。

大会前日（前書き）

今回はちと長いです

大会前日

京都駅からバスで長野まで向かう。その間バスの中ではほとんどの生徒が寝ていた。そして、出発して3時間後旅館に着いた。
今回林間学校に参加するのは1年だけだが人数はそれなりにいる。バスから荷物を下ろし、旅館に入る。
旅館のエントランスに部屋割りを記すボードがあり、それを見てどんどん中に生徒が入って行く。旅館の風体は極普通だが檜木の香りが漂っている。生徒達が荷物を部屋に入れる中に白髪の少女が先生におんぶされながら、部屋に向かっていた。

「すいません。バス酔いしてしまって」「仕方ないからね、バス酔いは」
舞久が謝るのはもうこれで6回だ。そして、舞久に謝られてる先生は4組の吉神氏弥生先生だ。
「子無さんと同じ部屋の人は？」「もう荷物を持っていってもらってます」
舞久は吐き気を押さえながら応える。
「それにしても、子無さんていろんな人に注目されてるのって知ってる？」
「えっとどんな風に？」
注目のされかたによっては暴動を起こさねばならないからな。
「前に闘技場で神東君と戦ってた時にあなた、血だらけになっても戦い続けたでしょ。あの時に多くの生徒と先生達、まあ私もだけど感動したと思う。女の子でしかも入学してたった1日、普通なら逃げるわ。だって、つい先日まで戦いとは無縁の生活をしていたからね。まあ、あの戦いの後にあなたの話題が飛び交ってたわ、クラスに押し掛けたりしてたわ、主に男子がね」やっぱりかと舞久は思う。
舞久が食堂に行く時も合同授業の時も妙に注目されていた。それは

自分の髪が白だから珍しいからと思って片付けていたが。
「まあ、あなた女子にも人気があるからね…男っぽいところがあるからかしら」「はあ、そうですか…あっここの部屋です」
吉神氏は舞久を下ろし
「じゃあ明日頑張ってね、期待してるわ」と言って去って行った。
舞久は部屋に入る。すると部屋の中には社　空理　夜音がいた。
「大丈夫？しんどいでしょ、布団用意したから、寝たら」「ありがとう、空理お言葉に甘えるよ」
舞久は布団に入る。
ああ、少しましになった。と思ったら社が布団に入ってきた。
「私も一緒に寝とくよ」
「はあ、別にいいけど…」いつもなら、社をここで袋叩きにしているが舞久にはもう力がなかった。
「もうすぐしたら、授業があるけどこれじゃ出れないね」「先生には私が伝えておく…舞それで…ってもう寝たのか？」と夜音が少し呆れながら言った。
「そうだね、かわいい寝顔だよ、ますます男の舞を見たいなあ」「どんな人なんだろうね？」と空理が言い「アニメを見ているのなら大歓迎だ」3人は舞久の容姿を想像する。
だがもう授業が始まる時間が迫っている。
「じゃあそろそろ、行こっか」と社が言い、3人は部屋を後にした。

――――――――

林間学校の合同授業は、授業という名目だがほとんど明日の大会の調整である。だがやはり大会は競争であり敵視するのは当然だ。
だから、今のこの場のムードは、殺伐としていて、かつ険悪さが漂っていた。
その中に社　空理　夜音　滝人そして、時彦がいた。
「それで子無は部屋で寝てるのか、バス酔いするなら酔い薬を持ってくればいいんだがな」時彦が言い滝人がそれに応える。「まあ、

あれだ遠足でわくわくしてて酔い薬忘れちゃった、てへっみたいな感じだ」「遠足での忘れ物が酔い薬はないだろう、あとさっきの気持ち悪いからな」「俺もやめときゃよかったって思った」と軽く談笑している。すると、隣に一人の少女がやってきた。
「あらあら、調整は終わりましたの？」「ああ、もう終わったている。滝人だけだがな…で何のようだ？和神百（わがみもも）」和神百、ＡＣＥクラスで４組代表、縦ロールに整えられた黄土色の髪をしており、おっとりとした雰囲気をしている。「暇潰しよ、あと子無さんに会いに来たんだけど…いないみたいね」「あいつならバス酔いで具合が悪くてな、部屋で寝てるぜ」「そういうことだ」「ふうん、案外かわいいところもあるのね、彼女」百がうなずきながら言う。「でも彼女に会えなかったのは残念だったわ」百は誰が見ても分かるように肩を落とす。だがすぐに交戦的な目をして
「まあ、明日はお互い頑張りましょう。果たして私のクラスの有力候補の花神と医神に勝てるかしら」「舐めるなよ、聖杯を手にするのは僕のクラスだ」
しばらく火花を散らしていたが百が「それでは、ごきげんよう」と去って行った。

そして、合同授業が終わり夕食の時間が訪れる。
舞久も回復し、夕食を食べる。そして、部屋へ戻り、風呂に入る準備をする。
さて、ここまで順調に事は進んだ。だが風呂というイベントは舞久にとって死を意味する。そのため舞久は皆が入り終えた後に風呂に入ることに決めた。

「ふう、もう誰もいないし良かった」舞久はそうつぶらきながら浴場に入る。
猿が山から降りて湯に入ってんじゃねえのかみたいな光景が広がっている。

「ふういい湯だ」「ああ、そうだな」あれっ？何か聞こえたな、幽霊かな？幽霊だったら無視してやる。
「おい、無視するんじゃない」煙の向こうから声が聞こえる。これで俗世と別れるのかと思っていたら
「えっ神野先生？！」
煙が晴れると神野がいた。神野は舞久のところまで寄って来た。
「お前、難儀だな、精神が男だといろいろ気をつかうだろう」「そうですね、早く元に戻りたいです」舞久がそう言うと「欲情するんじゃないぞ。お前の周りには結構女があつまるからな」と神野がニヤニヤしながら言う。「起こさないですよ。俺だって一般常識はあります」すると神野が迷いながらも「少し気になるんだがお前、親はどうしてるんだ？」と聞いてきた。「両親は交通事故で死にました」「そうか…」「でも！」と舞久は立ち上がり「俺は両親に教えてもらったことを守る。それが俺にできる最高の親孝行だと思っています」「ふん、お前も頑張ってるんだな」「うっ」舞久は少したちろぐ。神野の笑顔が母親の笑顔に重なったからだ。優しさだけに包まれた笑顔が。
「まあ、明日は頑張るように、幸運を祈る」と言うと神野は浴場を後にした。
浴場には舞久と湯気だけが凡庸に佇んでいた。

風呂から上がり、マッサージ機で和む。そして、部屋に戻った。
空理は寝ていて、夜音と社はバラエティー番組を見ていた。社が俺に気付くと布団に入る。夜音もテレビを消して布団に入る。
俺も布団に入り、電気を消す。すると社が「明日は頑張ろうね」と言ってきた。俺は社がどんな表情で言ってるのかは暗くて分からないが笑って言ってるのは声音で分かる。
だから俺も
「当たり前だ」
と笑いながら言ってみせた

俺達の戦いはこれからだ！

聖杯合戦

ルールは至極簡単、各グループが北アルプスに入り、どこかにある聖杯を探しだすというもの。所要時間は１２時間、だが制限がいくつかある。まずは移動魔法を使わないこと、つまり体動速度を上昇させて山を登ることを禁止とする。
次に各グループとの協力的交戦的行動を禁止とする。最後に携帯電話等の持ち込みも禁止する。

クラス代表は主にゴール地点でグループの到着を待つことが義務だがクラス代表にはアドバイザーという権利をもちあわせている。各クラスグループから相談された場合助言することを許可する。そして参戦権という制限時間内だけ聖杯合戦に参加できる。

各グループには聖杯の異なったヒントが与えられる。ヒントは開始されてから2時間後に配布された通信機に通信される。

聖杯合戦は北アルプスを自力で登りながら、他のグループと連絡を絶ちヒントとクラス代表の助言にすがりつきながら聖杯を探すという大会である。

――――――――――

聖杯合戦　開始5分前
舞久達は通信機をもらい、聖杯合戦の説明を聞き終わり、最後準備をしていた。
「酸素ボンベと非常食とまあちらほら、これで準備万端だ」夜音がバックを背負って言う。「酸素ボンベっているの？」空理が首を傾げながら言い「高山病対策だ。２５００メートルから酸素濃度が減

り、頭に酸素が行き渡らなくなる。それで頭痛　吐き気　を催し、立てなくなる。それに合併症も引き起こすからな、酸素ボンベは必要不可欠だ」「そうか、高山病を忘れてたぜ」滝人が屈伸しながら、言った。確かに北アルプスのような高山では、高山病を引き起こし、死亡した例もそう少なくない。
「私がいれば山で遭難することもない。安心しろ」と夜音が自信に満ちあふれながら言う。「それ、遭難フラグ立ったんだが」と舞久が言う。

〈開始まで後1分です〉

「いよいよか、そうだ！円陣組まねえか？」滝人が提案し「いいね！やろ！」と社が承諾する。
社　空理　夜音　滝人　舞久が肩を組み円陣を組む。
「必ず聖杯を手に入れるぜ！俺達の戦いはこれからだ！」と滝人が叫び、
「「「「「オーッ！」」」」」と掛け声を上げた。

〈開始まで10秒前〉
「ああ、緊張する」
〈9〉
「わくわくしてきたよ～」〈8〉
「お前はどこの戦闘民族だ」
〈7〉
「まあ、気楽にやればいいんだよ」
〈6〉
「そうだな、気楽に行こうぜ」
〈5〉　〈4〉　〈3〉　〈2〉
〈1〉

〈開始！〉

生徒達は一斉に山を登り始める。

遂に聖杯合戦が幕を開けた

ヒントの内容

聖杯合戦が遂に始まった。各々のグループが山を登るその光景をクラス代表陣が高級そうな椅子に座りながら大型ディスプレイで視聴している。

「良かったよ、クラス代表になっておいてこんな時期に北アルプスを登っていたら干からびてしまう」
時彦が椅子にもたれかかりながらだるそうな目でディスプレイを睨む。
「あら、あなたそんなにサボり魔だったかしら」
百が時彦とは対称的に礼儀正しく座っている。
特に興味のない時彦は飲み物を取りに行こうとした時、ディスプレイに舞久達が写った。どこから撮っているのかは分からないが舞久達は比較的遅く登っていた「あら、頑張ってるわね、そういえば、九神さんは北アルプス付近出身でしょ
有利に立ててるじゃない」と他人事のように百が言う「九神もそうだが、一人忘れてはいけない奴がいるがな」「あら、誰かしら？」
ディスプレイに目を向けて百が訊いてくる。
「神民滝人、奴の体力は無尽蔵並だ、北アルプスごときでばてないさ」
時彦は不敵に笑いながら、言った。

――――――――――

北アルプス　２５００メートル地点（出発地点は１５００メートル）
　背の高い木々がほとんど生えていない。そこの少し開けた場所で舞久は休憩していた。
「けっこう登ってきたんじゃない…」「そうだな…休憩せずにぶっ

通しで登ってきたからな」社と時彦はあまり疲れた顔をせずに話している。よくそんなさわやかフェイスで話せるものだ。普通なら息が切れて話すこともできないのに
ほら、こんな風に
「はう〜、疲…はあ…はあ…ちゅかれた〜」と息切れすぎて何言ってんのか分からなくなってる。ちなみにこれは空理だ。夜音は山登り経験者だけあってそんなに疲れている様子はない。俺は登ってる途中でばてそうになったがジュース奢るという契約で滝人に負んぶしてもらった。滝人はあり得ない体力の持ち主である
２０分ぐらい休憩していた。少し休憩しすぎじゃないかと思っていたがその答えは滝人が発言してくれた。
「たしかヒントがあったろ、出発して2時間後に来る奴だな、もしヒントが一回山を降りろとかだったら元も子もないからな、それに2時間までもう残り少ないここは待つことにしようぜ、ヒント」と滝人が意外に計算していたことにこの場の全員が驚いた。いつもはおちゃらけているくせにと同時に皆が思った。
「お前ら、失礼なこと考えてるだろ？」滝人が女子陣を睨む。「まあまあ、こんなに美少女に囲まれてるんだからさ」と社がウィンクしながら言う。「悪い気はしないけどよお」と滝人は頭を掻く。すると「おい！」舞久が立ち上がり、険悪な表情を浮かべる。社は美少女と言ったことに怒ったのかと思っていた。
「俺もハーレム味わいたかった！くそ！」「えっ？そっち！」舞久は膝から崩れ落ち、「こんな思いを抱かせた神を俺は許さない」舞久は土を殴っていた。
舞久以外の全員が若干引いていた時
〈ヒントを伝えます、ヒントを伝えます〉
通信機から声が漏れる。
全員息を殺して聞き入る。〈聖杯のヒントを与えます〉と間を開ける。そして
〈ヒントは富士山の次に高い山です〉と告げた。

沈黙が続いた。
だが夜音が言葉を放つ
「富士山の次に高いのは北アルプスの北岳だ。北岳は３０００メートルある山だがほぼ岩肌だ。北岳からは晴れていれば富士山も見えるんだ」「北岳はどっちにあるんだ？」すると夜音は道を歩く。だがとぼとぼと今にも泣きそうな顔をしながら「分からない。てへっ！」「何がてへっだ！騙されねえぞ！」「だよね～～……ごめんなさい」夜音は素直に謝る。
希望が断たれたかと思ったが登山道の道分かれに看板があった。全員一斉に駆け寄り看板を凝視する。
そこには、
〔北岳まで残り１時間〕
「「「「「よっしゃ～～～！！」」」」」なんと登っていた道が北岳に通じていた。すごい偶然だ。
「よしじゃあ北岳に行くぜ！」
全員が歩き始める。北岳にいったい何があるのかは分からないがこのメンバーだったら大丈夫だろうと舞久は思った。

黄金の魔法陣（前書き）

感想お願いします。

黄金の魔法陣

開始してから４時間、
舞久達は北岳山頂に到着する。山頂には一般の登山者もおり、北岳と書かれたプレートがあった。

「北岳到着～　おお、景色が綺麗だよ！ヤバいよ！」社が子供のようにはしゃいでいる。まあ、はしゃぐのも無理はない。青空が広がってて眼前には雲海がある。非行者がこの風景を見たら2秒で心変わりするレベルだ。
「あっ富士山だ！富士山！カメラある？！」「あるわけねえだろ」
舞久が空理に応えると「いや、持ってるぞ」夜音がバックからカメラを取り、空理に渡す。
空理がカメラで富士山を撮っている間、北岳山頂を探ってみたがヒントらしきものはない。
「ヒントってなんだったんだ？」舞久が考えていると空理が撮った写真を見ていた。すると、ある事に気が付いたらしい。
「富士山が写ってない…なんで、あそこにあるのに」その言葉に全員食い付く。たしかに富士山は写っていない。なぜ写っていないのか全員が考えていた。
だが答えが見つからない。もうコナンに聞くしかないかなと半ば諦めていた時
舞久は生徒会書記の神都愛有を思い出した。
「単純に幻覚とかだろ」
「幻覚か、解いてみる？」と社が幻覚魔法を解き始める。
魔法を解除するのには種類がある。１つは増設方法、あらゆる魔法を付け足すことができる。２つは減装方法、魔法を減らし、能力を下げる。最後に解除、これは言葉の通り魔法を解除することだ。

「解けたよ～、それにしても舞よく分かったね」と言って社は舞久に抱きつく。「抱きつくな、邪魔だ」
男の俺だったら抱き締めているがこの状態じゃ意味がない。「ふ～ん、そんなこと言うの？ご褒美になにかあげようと思ったのに」
「ありがたき幸せ！社様！いえ姫！」舞姫は一瞬で心変わりした。
「オーッホホホ、舞あなたは私の奴隷よ、跪きなさい」舞久は跪く。
その光景をみながら滝人は通信機で時彦に連絡する富士山の幻覚は解いたがなにも起こらない。もう手段はなかった。

すぐに繋がり
〈お前ら、何をやってるんだ、子無と鳴神の茶番を止めろ！〉滝人は時彦に言われて舞久達を見ると雲海に魔法を放っていた。
「マジか、こいつら」
滝人は石を2人に投げて、茶番を止めた。

――――――――――――

クラス代表陣
ディスプレイには舞久が社に跪く映像が流れている。全員が唖然とディスプレイを見ていた。

「ふふっ子無さんて面白い人ね」と百が微笑む。
時彦はディスプレイを見ないで知らない振りをしている。ディスプレイでは舞久達が唐突に雲海に向けて魔法を放ち始めた。すると、ブー　ブーと通信機が唸り始める。時彦は素早くそれに応答する。
「お前ら、何をやってるんだ、子無と鳴神の茶番を止めろ！」ディスプレイには滝人に石を投げ、茶番は幕を閉じた。

「で、何なんだ？」その問に滝人は事の顛末を話した。「幻覚か、でこれからどうするか分からないか、子無に代わってくれ」と時彦が言い、「はい、子無ですが」「お前はきずいていたのか、雲海も

幻覚ということに」その問に舞久は「えっそうなの…いや、分かってたけど、何か？」時彦は「お前、遊んでたのか、雲海で」「え～遊んでるように見えた？違うからね、遊んでないからな」時彦は頭を押さえ、ため息をつく。「まあいい。つまり富士山の幻覚はフェイクだ、雲海の幻覚を隠すために作られたものだ。ミスディレクションの役割を果たしていたそしてお前らは雲海を消していた。まあ、その程度の幻覚ということだが、もう雲海は晴れているはずだ、だから雲海があった場所を見てみろ…ふん、健闘を祈ってるぞ」と言って通信を切る。

――――――――

北岳山頂

時彦からの助言により

全員雲海があった山々を見る。すると、黄色の何かが認識できた。

夜音はバックから望遠鏡を出し、眺める。

「あれは！すごいぞ！」

と夜音が望遠鏡を舞久に渡した。舞久は望遠鏡で黄色の何かを見る。

その正体は無限に張り巡らされた魔法陣の塊だった

悪魔、降臨

「あの中に聖杯があるんじゃね？」舞久が言うと「まあ、あるかどうかは分からないけど、怪しいからね、行ってみよう～」社が応える。だがあそこまで行くに最低でも2時間は掛かる。もし、向かっている間に他のグループが到着していたら後の祭りだ。それを考慮に入れてか、空理が

「地形を変えれば、すぐに着くけど」ととんでもないことを提案する。全員空理の思惑が分からない。もし無闇に地形を変えれば、どうなるかは予想が着く。

「山頂には誰もいないよね」一般の人がいないのを確認してから

「ライ　オブ　ザ　ランド」魔法名を口ずさむ。

すると、魔法陣が空理の下に形成される。魔法の色は茶色だった。

「その魔法陣なんで色が違うんだ？」舞久の率直な疑問に空理は当たり前のように応える。

「魔法陣は形成される環境状態によって色が異なるの、そしてこれは環境が山だから茶色なの」また1つ賢くなったと舞久は思った。

「じゃあ、行こ」空理の言葉に歩き出す。端から見たら、斜面を歩こうとしているように見える。

だが、空理が歩くところは全て階段になっている。

そして、歩き終わったところは普通の土に戻っている。「鋼の錬金術師だろ、お前」舞久の冗談めいた言葉に「あながち、間違ってないよ」とフラグとも取れる事を言った。

普通なら2時間掛かるのを空理の錬金術みたいなので30分しか掛からなかった。平らな地形に入り、黄金の魔方陣に向けて歩く、そして、黄金の魔方陣に到着した。

「魔方陣の塊だね～これは解けないよ」この黄金の魔方陣の塊は幾千の魔法で固められている。これを解くとなるとスーパーコンピューター並みの頭脳がなければいけない。
「無理ゲーだなこれは、誰かチート能力持ってる奴いないのか」舞久が呆然と魔方陣を眺めていたら
「いるじゃないか、ここに！！」甲高い男の声が響く。全員が声のした方へ振り向くと他のグループがやってきていた。
「俺は４組の花神透弥だ」
「私は４組の医神あろえです。魔法が解けないのであれば即刻立ち去って下さい。邪魔ですから、後子無さんはこちらに来て下さい」と自己紹介した途端に呼ばれ舞久は戸惑う。
「えっ行っていいの？」
舞久が空理に聞くと
「いいよ！犠牲になってね、私達はあなたのことを忘れない」空理は演技しているかのように言い、「ね、皆」と同意を求め「頑張ってね」と笑顔で社が言う。「遠回しに死ねって言ってんの？」「そうなるんじゃない」舞久は泣いた振りをしながら、「もう知らない！寝返ってやる！」と言って花神達の所に行く。
社は待って～ごめんと笑いながら行くが夜音に止められる。「今のうちに少しでも魔方陣を解除しておこう奴の犠牲を無駄にするな」
「そうだね～じゃあ今のうちに」社達は魔法の解除に向かった。

一方その頃舞久はというと「お願いします。あなたしか居ないんです」と医神が必死に頼んでいた。それはもう世界の命運を託すような声音で。
「いや、でもこれは、その…」と舞久が口籠もる。
「なぜですか？貴方はなぜ拒むんですか？好きだと言ったら返事をするでしょう！」そう、今俺は告白されたのだ、それもこの医神という女に。相手は返事を待っている。どうしようか、相手は俺が融合体であることを知らない。知っていたらこんなことは言われなか

った。
『理由を聞いてみたら？』守が凄く久しぶりに話した。お前と話すの久しぶりだな、今まで何してたんだ？『探検してたのよ、舞久の深層世界を、でも長かった～、山あり谷ありでさ、もう大変』お前暇人かよ、ニートになるぞ『うるさいな、それよりなんで好きなのか聞きなさい』まあ、そうだな動機を聞かなきゃな。「あの～なんで私のことが好きになったんですか？」あろえは間髪入れずに
「はい！清楚なところとキリッとしたところとスタイルがいいのと男の子っぽいとかです」大雑把すぎる。『断りなさい、こんな状態で認めても意味はないからね』そうだな
意を決して断ろう！

「医神さん」
「はい！」
あろえは笑顔で一杯だ。断ることに罪悪感が生まれたが、
「気持ちは凄くうれしいけど、ごめ…」
ドオン
鈍い音が響いた。木々が倒れている。炎が逆り森を燃やしていた。
「何だ？この魔法は！」
文献に載っていたような気がするが何の魔法かは覚えていない。「医神！お前は分かるか？」花神の問に医神は「狩人の力だと思う」
「何！？」狩人だと、なぜそんなものがここに。

炎の中から鎌を持った人間らしきものが現れる。
姿は金髪ツインテール、舞久を神軍に招集しようとしたエルンだった。
「なんでお前がここに！」舞久は目を見開く。
その表情を見てエルンは見下すような目をしながら
「子無舞久、あなたを狩りに来たんですよ」
妖艶にさながら悪魔のような形相で告げた。

元に戻る（前書き）

感想お願いします。

元に戻る

クラス代表陣では狩人が出現したことにより騒動が起きていた。狩人が現れることはフリーザーが第三形態になった時のピッコロの心情とほぼ同じだ。
ディスプレイには狩人が映っている。背後には焼け落ちた木々が倒れている。
その凄絶な光景を時彦達は凝視していた。

「なぜ、狩人が来てるんだ！！」なぜ来たのかは分かっている。おそらく、子無を捕らえに来たんだろう。だが狩人の能力は相当なものだ。奴らだけで戦っても勝てるかどうかは判別しかねる。
「トイレに行って来る」
時彦はおもむろに立ち上がり、部屋を出ていく。
トイレというのは口実だ。
「待ってください、私も行きますわ」百が後を付いてくる。「お前もトイレか？」その問に百はいたずらな笑い、「ふふっ嘘が下手過ぎよ…助けに行くんでしょ、なら私も行きますわ」
「僕は知らないからな、ふん、勝手にしろ」
2人は騒動が起こっている中歩き続けた。

――――――――――
監視令部

職員達は状況の収集に当たっていた。
「エリア12応答しろ、状況はどうなっている！」
〈防壁が張られています。入ることが出来ません〉
「くそっ！「神野先生！」なんだ！」吉神氏が慌てて入ってくる。

「神東君と和神さんがいません…」吉神氏は絶望的に発言した。狩人が現れたエリアは防壁で侵入不可能になっている。言い換えれば防壁内にいる生徒達は狩人を倒さない限り外へは出られない。かなり絶望的だが希望もある。
「あれに賭けるしかないか」神野は苦虫を噛んだような顔をして呟いた。

―――――――――

北アルプス

眼前に広がる惨状な光景を俺は呆然と眺めていた。放心状態だ。立ち尽くすばかりで言葉も出ない。
エルンが現れたことにか？違う、そうじゃない。社達はエルンに攻撃を仕掛けた。だが魔法は使えなかった。防壁の能力で魔法を使えないようにエルンが行動していた。
だから皆血だらけになって倒れた。人形のように易々と、今俺は唯立ち尽くしていた。

「弱すぎです～、まだ学生だからって魔法が使えるんだからさ～」と間延びした口調で話し続ける
鎌には血がべっとり付いている。
「じゃあ、最後に子無舞久お前を狩る！」表情が一変する。殺意が迸る。
今になって現実に戻される。辺りの凄絶な光景が視界に入る。
「舞…逃げて…ぐふっ」
社が血だらけになりながらも俺の心配を…
怒りが沸々と込み上げる。これまでにないぐらいの怒りの感情が俺を侵食した。
「てめえええええ！！！！」無意識下で舞久は移動魔法を発動させる。

日本刀を召喚し、斬りかかる。だが「遅すぎ～落胆したよ～」エルンが悉く刀を素手で受け止め、鎌を盛大に振りかぶった。
「うっ、くはっ！」
舞久の肩を鎌が抉る。
「お前が私を斬った時もお前と同じ痛みを負ったんだ！」エルンは舞久の肩を踏みつける。強く恨みを晴らすように
「ぐあああぁっ！」
悲鳴を上げる。生涯味わったことがない痛みが舞久を襲う。
『舞久！！』守の声が脳に響き渡る。
そしてエルンは踏みつけるのを止め、舞久の首を掴んで持ち上げる。小さな体のどこにこんな力があるのかエルンは嘲笑しながら、
「お前の体を元に戻してやるよ」「えっ」
エルンの手に淡い黒の物体が溢れ出る。それが、舞久を包む。
抵抗するが無意味だ。
そして、舞久は全身を包まれた。
「天理魔境、事象を破壊」エルンが呟き、
そして、舞久の体が
２人に別れた。

聖杯は剣を託す

「なっ！」
体が別れて行く。
分裂という言葉がこの現象には合うだろう。
脳と体がどこにあるのか、そんな当たり前のことも思考できなくなるくらい頭が働かなくなる。だがその乖離現象も終わりを見せた。
「舞久！」その言葉で我に返る。「えっちょっ」舞久は目前にいる白い手に捕えれ放られてしまう。
「いきなり何なんだよ！」体が思うように動かない。「待て待て待て待てええ！」そのまま減速せずに盛大に黄金の魔方陣に突っ込んだ。

「お前、助けた気になってんの～？」エルンは一人残された守を殺意のこもった双眸で視る。それはまるで嫌うような冷酷な雰囲気を漂わせている。
「舞久に望みを懸けただけ」言葉の真意は分からなかったが守がまだ諦めていないことに酷い嫌悪感を憶えた。「お前は用無しだから～殺してやるよ」
そして前に踏みだした。

「痛っつ～、誰だよ、投げたの」舞久は頭を押さえながら、辺りを見る。
どうやら魔方陣を突き破って中に入ったようだ。
暫く、辺りを見回すと、青い器があった。見るからに堅そうな台の上に置かれている。舞久はおそるおそる近づく。歩くごとに傷が痛む。そして器に手をかける「これが聖杯…」聖杯は一定に光を帯び

ている。誰が見ても普通には見えない。見惚れていたがそんなことしている時間はない。
「助けにいかないと…」
再び惨状の場へ、歩きだそうとした。
「聖杯を…」綺麗な女性の声が聞こえる。「声？」
「聖杯を守護する者は裏切りの剣を聖杯を奪う者は強欲の剣をそして聖杯を見守る者に聖者の剣を…汝はどの剣を手にしたい」
聖杯が語りかける。
剣を選ぶことを選択する。だが舞久は
「裏切りの剣とか強欲の剣とか聖者の剣もいらない」剣を手にすることを拒絶する。
「俺はまだ高校生だ。本当なら普通に勉強して青春してあわよくば恋愛とかしてたかもしれない。普段の俺なら今のうちに逃げてた。でも！俺は仲間を守りたい！ここで逃げたら男じゃない」舞久は決意を秘めた顔をして「だから仲間を守ることのできる剣を俺に渡してくれ」と選択肢に存在しない剣を応えた。
静寂が訪れ、聖杯は黙りこむが嬉々とした口調で
「汝のような人間を待っていたのだ、聖杯は」
聖杯が強く光りを灯す。
「聖杯を強く握るんだ」
舞久は聖杯の言った通りに聖杯を強く握った。
「汝に託そう、我が聖杯の剣を、此の剣で汝の守りたいもの守り斬るんだ」
聖杯が太陽のように強く輝いた。

「人間っていうのはなんで心なんてものを持つんだろうね～一層、心を壊して本能のままに生きればいいのに、なら仲間を守りたいなんて思わないからね～」
エルンの哲学的発言を守は意識が朦朧とした状態で聞いていた。

もう体は動かない。しんどくて、痛くて今にも死んでしまう。
守はエルンに幾度も攻撃を食らわされた。エルンは瀕死の状態である守をただ見ている。死ぬのを待っている。
周りで倒れている夜音や空理　滝人と花神　医神も血だらけになって倒れている。「まだ死なないな～、向こうに倒れてる奴らもまだ生きてるし～」エルンは子供のように指を唇に当て
「一思いに消しちゃおう！」鎌を地面に突き刺した。「天理魔境、生命有る者達を滅ぼせ」鎌から魔方陣が拡がる。魔方陣は広範囲に形成される。
「舞久は逃げられたかな、生きててよね」守は死を覚悟する。
魔方陣の拡大が止まり、鎌を地面から抜き、
鎌をもう一度突き刺した。魔方陣が光る。
「キャハハハハ！死ね！人間共！！」エルンが狂喜に笑う。
「うるせえんだよ、屑が！」空から男が落ちてくる。そして魔方陣に剣を刺した。

ビシッ

魔方陣が強制的に解除され電気が迸る。
「なっ！お前！戻って来たのか！」
エルンは驚愕する。
なぜなら、もうとっくに逃げていたと思っていたからだ。
「なんで、なんで！戻って来た！」わからない。普通なら逃げるはずだ。なのになんで戻って来た？
エルンが叫ぶ先に黒い男性の髪をし、昔通っていた高校の制服着て、両手に青い剣を持った
「決まってんだろ、仲間を助けに来たんだ」
舞久が悠然と立っていた。

援軍、到着

監視令部

幾つかあるディスプレイに舞久が映っている。
だが見知らぬ人間の登場に多くの人達が戸惑っていた。
「神野先生、あの子は誰なんでしょうか」吉神子はディスプレイの舞久を指差しながら言っている。
職員は全員必ずと言っていいほど生徒の容姿と名前を一致させて覚えている。
それが職員の常識なのだが全く記憶になかった。
だが神野だけは舞久のことを認識していた。
「ふっやっと会えたじゃないか、子無舞久」
神野はすべてを知っているかのように言った。

――――――――

北アルプス

舞久とエルンはお互いに睨み続けていた。
防壁は舞久の剣で破壊された。あの魔方陣を壊した次いでにだ。彼らが動かない間に空理と夜音が密かに動いていた。

「空理…動けるか？」
夜音が匍匐前進しながら空理に近づく。空理はまだ息はしているが危ない状態だった。急所は外れているが多量に出血している。このままじゃ失血死してしまう。回復魔法もできない。夜音は攻撃重視のスタイルであり回復魔法はあまり勉強していなかった。実戦にはまだ出ないと思って勉強していなかったからだ。
「油断したな、考えが甘かった…」今にも自分の非力さに泣きそう

だ。こんな時に泣いてしまう弱い精神に腹が立つ。
「九神さん、神茂さんを治癒しましょう」医神が花神の肩を借りてこちらにやってきた。
そして空理のそばに座る。「夜音さん達には言ってなかったわね、私達2人ともＡＣＥクラスなのよ」
夜音は驚かない。
分かっていた。だがそんな2人でも狩人（エルン）には勝てなかった。
防壁の能力のせいでもあるが。
「ここは私達に任せて、あなたは鳴神さんと神民君の所に」医神は空理を治癒し始める。
夜音は「任せる」と言って足を引きずりながら歩き出した。
歩いている途中に舞久を見る。「あいつが子無舞久か」少しイメージとは違っていた。白髪じゃなく黒髪だった。他は意外に端正な顔立ちをしている。
夜音は少し恥ずかしくなり舞久から顔を背けて社の元に辿り着く。
「大丈夫か？」社は目を薄らと開いて社を見る。少し微笑むが荒い息をする。
話す力もないようだ。いつも元気に無邪気に騒いでいるのに今はそんな気も見せない。すると社が口を動かす。
夜音は耳を傾ける。
「舞は…どこ？」弱々しい声音で言う。
「舞は男の姿に戻ったんだ」社は僅かだけ表情を変え切ない顔をした。
「はあはあ、見たいな～
舞の姿」社はずっと前から舞の男の姿を見たがっていた。「私、もう死ぬのかな～死にたくないなぁ…うっぐす」社は泣き出した。
必死に泣くことを堪えようとするが涙は止まらない。「死ぬわけないだろ、何言ってるんだ！」
夜音が叫ぶ。今にも死んでしまいそうな社に叫んで意識を繋ぎ止めようとする。だが社は瞳を閉じていく。ゆっくりとゆっくりと

「社！おい！！まだ生きなきゃ死んじゃダメだ！」
夜音は泣きながら、社に言う。だが社は
「ありがとうね」
そう言って瞳を閉じた。
「社？社！」
もう目を覚まさない。
社の目には涙が流れていた「夜音！社は？！」
滝人が右目を押さえながら歩いて来た。
どうやら右目をやられたらしい。だが滝人は社が瞳を閉じた状態で倒れているのを見て
「死んだのか？」
滝人は力ない声で言った。

「おおっ一人死んだかな？」エルンの弾んだ声音に舞久は反応する。辺りを必死に見回す。そして、大きい岩の所で社が倒れている。その横で夜音が泣いている。
「死んじゃったね～、可哀想、もっと生きられたのに」エルンは馬鹿馬鹿しく言う。嘲笑うように人の死を面白がっている。
舞久は移動魔法を発動させてエルンに勢いよく斬りかかる。だがエルンに悉く受け止められる。
舞久は勢いを止めず連続で攻撃するが受け止められる。
「どうした～ヘボイ攻撃ばっかして」エルンは鎌に魔力を溜め、「死ね！！」
思い切り舞久を斬る
「ぐっあああああ！！！」舞久は聖杯の剣でなんとか防いだが後ろにふっ飛ぶ
凄まじい力によろけながらも立ち上がる。
「う～ん、死なないなあ、早く死ねよ！どうせ私には勝てないんだから」
エルンは鎌は振り回しながら思い通りにならないことに苛立ちを見

せている。

「死なねえよ、俺は死なない」「はぁ、殺すぞ、お前！」エルンのフラストレーションは限界に達している今にも斬りかかりそうだったが舞久の言葉で思い留まった。

「仲間を守るのが俺の役目だ、だから俺は守り切るまで死ぬわけにはいかねえんだよ」剣を構え、戦う意志を見せる。

「お前！」

「よく言った。褒めてやる」声が聞こえた。

すると、舞久の前に2人の人影が現れる

「ふん、あれが狩人か、強そうだな」男の声が言って「まあ、私の前にはすべて平等な存在ですけど」

女の声がそう応える。

姿がはっきりと認識できた「お前！なんでここに」

「ふん、決まっているだろう、お前達を助けに来たんだ」

そこには、

我らがクラス代表神東時彦と4組クラス代表和神百が立っていた。

最後の抵抗

「和神、鳴神達の所へ行ってくれ、もう手遅れかもしれんが」時彦が珍しく自信なさげに言う。
百はそんな時彦を珍しいものを見る目で見ながら
「任せない、絶対に助けるから」百は移動魔法で社達の元へ向かった。

舞久と時彦が残された。
時彦は舞久を見て、短く笑い
「ふっ、はじめましてだな男のお前と会うのは」
「俺は毎日お前の面を見てたがな」舞久は皮肉を垂れる。実際闘技場で戦った以降で舞久は時彦を注視していた。
時彦はエルンに振り返り、「さて、そこのクズ聞こえてるか？」「誰がクズだ！！」挑発的言動にエルンは怒りを露わにする。
だが時彦はあっさり無視して「どの口がそんな事言ってんだ！！調子に乗るなよ！」「うっ」エルンは時彦の怒声にたじろぐ。
「僕のクラスの奴らを傷つけることは5組に喧嘩を売ったということだ。だからお前を粛清してやろう、覚悟するんだな」
時彦は魔方陣を形成し
「子無、お前は前衛を頼む」「了解」
舞久は前へ踏み出し
両足に魔方陣を形成する
「後方は頼んだぜ、クラス代表」「言われなくてもだ」
「私を倒す気か！人間如きが！」エルンも魔力を放出する。辺りが魔力で満たされる。普通の人間なら立てないほどの圧力だ。
だが2人ともそれに怯まずに立っている。
「お前魔王の戯れ言みたいなこと言ってんじゃねえよ」舞久は態勢を低くして、移動魔法を発動させた。

「ラピット　トランシット《高速の脚力》」
凄まじい速度で走り出す。この移動魔法は基本系に属している。簡単な魔法だが単純に鍛練すれば絶大な能力を発揮する。移動魔法は経験値が高ければ高いほど能力が高くなる。

「そのまま構わず進め！！」時彦が叫ぶ。
舞久が向かっているのを見ながら魔方陣を形成する。今から行う魔法は無陣法では発動できない。

「プレイリスト」

白銀の魔方陣が浮かび、数字が横並びに書かれている数字は２０まで存在している
「１　４　８　１２　１４」指名された数字が時彦の元へ移動する。数字はすべて色が異なっている。
「再生だ」
その言葉と同時に若い番号順に魔法が発動してゆく。「１　フレイム　スィール
《焔の刻印》」
舞久の身体に刻印が浮かび上がり焔を纏う
《焔の刻印》はすべての身体能力を極限にまで上昇させる補助魔法の一種。
「４　セミナリオの盾　」
時彦の前にトランプの盾が出現する。セミナリオの盾は初代生徒会会長が作った防御魔法。

「８　黄龍の咆哮」
魔方陣から獣の雄叫びが聞こえる。これを耳にしたものは動くことが不可能になる拘束魔法。
「なっ！動けない」

エルンには効果があったようだ。
だが間髪入れずに
「１２　蒼穹の名のもとに」エルンの天上に青い魔方陣が形成される。これは遠距離攻撃魔法の能力を上昇させる補助魔法。
ここまで約１０秒しか経っていない。この短時間でこれだけの魔法を発動できるのは時彦が高位の魔法技術を備えているからだ

「くっ動け！」エルンが拘束魔法を解こうとしているがそれは無意味。黄龍の咆哮を解くには同じ黄龍の咆哮を浴びないと解けることはない。
「さて、これで最後だ」
１４が砕け散り渦を巻く
渦が天上の魔方陣にまとわりついた。
「１４　ロスト　アストゥラノミ《失われた暦象》」
空が暗転する。時間という概念を無視した空間が形成される。そして、魔方陣から槍が降り注いだ。
それはエルンを突き刺してゆく。だが
「うあああああぁぁぁ！！」エルンは全力で拘束を解き槍を壊す。魔力を帯びているエルンは本物の悪魔より恐ろしい戦慄さを思わせる。
「どうだ！！お前のかけた魔法は砕いたぞ！！」
エルンは傲慢な態度で時彦を見た。だがある事に気付く。
「子無舞久はどこに…」
さっきまで向かって来ていた舞久がいなかった。

「どこ見てんだよ」
後ろから声がしてエルンは反射的に振り向く。
そこには焔を纏う舞久がいた。舞久は右手の剣でエルンの腹を斬る。
「がはっ」血が飛び散る。いつ私の後ろに！
エルンは鎌を振ろうとするが鎌は手元にはなかった。「か、鎌はど

こに…」
だが思考する暇は与えない「お前に一つ言っておくぜ」舞久は剣を構え
「キャラは統一しとけよ」「や、やめろ…」
舞久はエルンを思い切り焔を纏った剣で斬る。
「あう、がはっ…」
エルンは吐血し倒れる。
今回は魔方陣は出現しなかった。
「終わったな、はあはあ」舞久は時彦の元に歩いていく。「勝ったじゃないか」時彦が微笑を浮かべて言うそして時彦はエルンを一瞥し「狩人が死ぬ時、奴らは塵となって消えてゆく、後ろは振り向くな」「分かった」舞久と時彦は後ろを振り向かずにその場を去ろうとした。だが舞久の脳の中で映像が蘇る。
それは黒髪の女の子と俺が遊んでいる記憶、守じゃないもっと幼い子供と
声が聞こえてくる。
「お兄ちゃん」と俺を呼ぶ声が脳を駆け巡る。
しまいに頭に激痛が走る。「ああ、あああああっ！！」あまりの頭痛でうずくまる。「おい！どうした！」心配して時彦が近づいてくる。涙が出てくる。俺じゃない誰かが涙を流しているような感覚。
お兄ちゃんと呼ぶ声が拍車を掛けて大きくなる。
そして
「お兄…ちゃん」
後ろから声がした。
振り向くことが恐怖だった見たくなかった。
でも俺は振り向いた。

エルンが倒れていた所に黒い髪をした女の子が血を出して倒れている。
容姿はエルンと同じで髪の色が黒になっただけだ。

その子を見た瞬間に守を思い出した時と同じ衝動が俺を襲い、俺の口から言葉が発っせられた。
「羅魅」
それは世界でたった一人の俺の家族であり俺のたいせつな妹の名前だ。
俺は大切な妹をこの手で斬ったんだ。
「うああ…ああ」
声が出ない。何も考えられない。
「お兄…ちゃ…ん」
弱々しい声が俺の耳に入ってくる。そして俺は改めて自覚させられる。
「俺は大切な妹を斬ったんだ」

兄としての役目

舞久達が戦いを終えた時
百は社の治癒に専念していた。夜音はそれを祈りながら見ている。

「なんとか大丈夫、一命は取り留めたわ」額に浮かぶ汗を拭いながらそれでも片手で治癒を続けながら告げる。さっきまで張り詰めていた緊張感が少し和らぐ。
「さすがだぜ、４組クラス代表なだけはある」滝人は百の治癒能力をめでる。
「あらあら、お褒めを貰うなんて嬉しいわ」百は鷹揚とした態度で応える。彼女の回復魔法の技術は別次元の腕だ。それでも高慢に自ら能力を誇示することはない、だから彼女は男性からも女性からも支持を得ている。

「そういえば、神東君達はどうなったかしら？」
百は黒い球体を見る。
あの球体は時彦が発動させた《失われた暦象》で形成された時間という概念を無視した空間、能力はすべての事象に存在する過去を浮上させることと大罪の槍を出現させること
大罪の槍は突かれた者の罪を抹消させる槍だ。

「上手くいくかしら」
百は神野に通信で告げられたことを思い出す。

――――――――

時彦と百が舞久達を助けに行った直後
神野から通信が入った。
内容を聞いた時２人は驚いた。

〈子無達と戦っている狩人は子無の妹かもしれない。これは推測だ。まだ判別しかねる。だからなんらかの形で狩人の過去を見てくれ神東、確かお前はそういう類の魔法が使えたはずだ。すまないが狩人の過去を見てくれ〉この通信を受け神東は《失われた暦象》を使用した。

――――――――

まさか本当に妹だとは思ってなかった。半信半疑だったがこうして目の前に弱々しく倒れている少女がいる。時彦は羅魅の元に膝をつき傷の具合をみる。

回復する見込みはあるが時彦の治癒能力では少し物足りない。そう思っていた時

「その子をどうするの？」医神が近づいて来た横には花神と空理そして守がいる。

「治癒するんだが医神できるか？」「分かったわ、任せて」時彦が退いて医神が座り治癒を開始する。

「この子、羅魅ちゃんじゃ」守が目を見張る。

だが咄嗟に平然に戻り、

「舞久は何処なの？」

少し語調を強めて言う

「あそこだ、妹を斬ったショックで立ち直れなくなっている」時彦は親指を後ろに向けて言い守も親指が指す方向を見る。

「僕は説教というものが苦手なんだ。だからお前があいつの目を覚ましてやってくれ」時彦が羅魅を見ながら言う。羅魅はまだ「お兄ちゃん」と舞久を呼んでいる。時彦にはそれが見るに耐えなかった。

守は舞久の所に行き

「舞久」と優しく呼んだ。その声に気付き舞久は守を見る。

「守…俺は羅魅を斬った最低の兄だ」舞久は自分を責めるように呟いた。

誰かお前は最低だと言ってくれ、その方が楽だと舞姫は思っていた。
だが守はそれとは対極的なことを口にする。
「舞久は羅魅ちゃんを助けたじゃない」
俺が羅魅を助けた？
どこが助けたことになるんだ？！
「舞久が羅魅ちゃんと戦わなかったら羅魅ちゃんはずっと狩人として生きることになってたのよ」
「でも、俺は…」
「でもじゃない！！」
守が叫ぶ。舞久が守の顔を見ると泣いていた。
「なんでお前が泣いてんだよ」
舞久は分からない。なぜ守が泣いているのか
「羅魅ちゃん呼んでるよ、お兄ちゃんって舞久のこと」「！」
「舞久は羅魅ちゃんのお兄ちゃんでしょ！お兄ちゃんなら妹のそばにいなさい！！それがお兄ちゃんの役目でしょ！！！」
舞久は土を握りしめた。

俺はただ逃げてただけだ。あいつの顔を見るのが恐かっただけだ。
俺は兄貴なんだからな、妹を守るのは当然だ、それに世界でたった一人の家族なんだから

舞久は力強く立ち上がり、守に一瞥を与える。
「ありがとな、おかげで目が覚めた」「どういたしまして」

俺は羅魅の元へ歩く。
その間の時間がとても長く感じた。
皆が俺を見つめる
多分俺を初めて見る奴もいるだろう。
羅魅の治癒をしてくれている医神が俺に話しかけた。「手を握って

あげて」
俺は羅魅の横に座り、羅魅の手を握る。
羅魅は手を握られたことに気付き俺を見て無邪気に笑った。
「お兄ちゃん！やっと…会えた！」羅魅は俺の手を強く握る。だから俺も強くでも痛くないように握った。「羅魅、ごめんな、気付いてやれなくて、ごめんな」俺は泣いてしまった。もう高校生だ、それに皆もいる。でも涙は止まらない。
俺は羅魅が狩人になっていたことを全然知らなかった。羅魅がどんな気持ちで狩人になったのかも知らなかった。
「泣かないでよ、私お兄ちゃんが助けにきてくれるって信じてたよ、昔お母さんが言ってたから」母さんが？なんて言ったんだ。
「羅魅が危なくなったらお兄ちゃんを呼びなさい、必ず助けてくれるからって」思い出した。羅魅が生まれて父さんと病院に行って羅魅を初めて見た時母さんが俺にこう言った。

「舞久はこれからお兄ちゃんになるの、お兄ちゃんの役目はなんだと思う？」
この時の俺は「何なの？」と聞いていたはずだ。
それに母さんは
「お兄ちゃんの役目は泣かないことよ」

母さん、今だけは役目を放棄するよ。
俺は号泣した。もうすべてを吐き出すように泣いていた。すると羅魅が俺の頭を撫でる
情けない姿かもしれないが構うもんか。
そして、
「助けてくれてありがとう、あとただいま！」
羅魅は会心の笑みを見せる「お帰り、羅魅」
俺は涙を拭いて言った

もう俺は泣かない。
これで最後だ。次からは守ってみせる。たった一人の家族を。

兄としての役目（後書き）

これで最終回じゃないからね

夏の夜の静寂

聖杯合戦は終了した。
あの後先生達が来て皆を旅館に連れて言った。
先生達は何か聞いて来ると思っていたが話しかけては来なかった。
旅館に着いて俺達は医務室で最終治療してもらった。だが社と羅魅は重傷を負っていたため療養することになった。
そして、今は丑三つ時
幽霊の帰省ラッシュが最も激しい時間帯に俺は無性に寝れなくなって縁側でコーヒーを飲んでいた。
コーヒーを飲んだら寝れなくなるんじゃね、と思ったが気にしたら負けのこの世界だ。いちいち気になってたらノイローゼになる。
それで今は縁側で一人コーヒーを飲んでいる。

縁側という日本固有の建築造は現代では希少価値のあるものだ。舞久は縁側というものを初めて見たので若干テンションが上がっている。これで益々寝れなくなったなと思っていた頃
廊下を歩いている女子生徒が目に入った。
舞久に気付き近づいてくる「あら、あなたも起きていらしたの」百が話しかけてきた。髪をおろし、寝巻を着ている。月明かりが彼女を魅惑的に映している。
「貞子かと思った」
「む、失礼なこと言うのねあなた」百が顔をしかめ、少し不機嫌になる。
だが仕方ないだろう。
丑三つ時で髪が長い女が近づいてくるんだ。誰だって貞子を想像する。
「医神が残念がってたわ、子無舞さんに会えないことに」百は舞久

の顔を窺いながら言う。どうやら舞久の返答に興味があるらしい。
その問に舞久はうんざりしたように「子無舞は実在しない人間だ」
とだけ応えた子無舞のことは後日セミナリオでも広がるだろう。
先生達がうまく対応してくれると思うが秘密はいつかばれる。まあ
その時にはうまく立ち回るが。
「あなたがそう思ってても子無舞という人間がセミナリオにいた時
間を忘れることはできないわ」百が舞久の手を握りながら言う。舞
久はそれに動揺してしまう百のような美少女に手を握られたことは
経験したことはない。それに寝巻が少しはだけて綺麗な白い肌が見
えている。
ヤバイ、理性を保たねば！円周率、こういう事態に円周率だと舞久
が心の内で慌てている最中
百は目を閉じている。
あれ？これなんてエロゲ？じゃない！これは！いわゆるキスか、い
や判別するには軽率すぎる。
「なんで目閉じてんの？」百は頬を赤らめ、顔を反らす。そして
「キスをしようと」
と舞久を横目でちらちら見ながら応える。
イベントだ！俺にも契機が回ってきた！と心の中で喜んでいると
「何してんの？あんた達」俺の初日の出を邪魔する奴が現れた。
「守、お前も起きてたのか」守が少しムッとした表情を浮かべてい
る。明らか怒っている。
「何しようとしてたの？」守は舞久ではなく百に訊いている。百は
舞久の腕に抱きつき「秘密ですわ」と言う。だが守は得意気な表情
になり、「言っとくけど、舞久のファーストキスはわ・た・しなの
よ」と「私」を強調しながら言う。
「えっ、そうなのですの？」と百が俺に聞いてくる。いや、そんな
記憶ないけど「それにお風呂も小学生くらいまでは一緒に入ってな
しね」「嘘よ、貴方たちどういう関係なの？」
風呂のくだりいらねえだろこの野郎！！

「幼馴染みですが何か？」守はそれだけ言ってどこかに消えていった。
あいつとんでもない地雷を踏みやがった！
どうしてくれるんだ？！
俺の初陣を！！
「たとえ幼馴染みでもわたくしは諦めませんので」
百はそう言って舞久の肩を叩く。振り返ると
百が舞久にキスをしていた。甘い柑橘系の香りが舞久の鼻腔を通り抜ける。
「ふふっではまた学校でお会いしましょう」と言って百は去っていった。

静寂が訪れる。
昼間のような蝉時雨は今は聞こえない。今は風で揺れる木々の擦れる音しか聞こえない。
「星空が綺麗だ」
現実逃避も兼ねて星空を見る。旅館がある所も標高はそれなりに高いし町の喧騒もこの環境にはどこにもない。だから俺は夏の夜が好きだ。昔の思い出もあるからだけどな。
「ふっ、これもまた一興かな」
舞久は静かにそう言った。

夏の夜の静寂（後書き）

第一章オワタ

第二章―レギオン（前書き）

第二章突入しました。

第二章―レギオン

よく朝起こしに幼馴染みが家に来るというシチュエーションが様々なマンガやゲームで使われている。俺も昔は守に窓から入って腹に一発入れられて起きていた。だが未だに体験していないシチュエーションが存在した。それが妹だ。
妹が朝どうやって起こすのか俺は全く知らなかった。

「お兄ちゃん、あ～ん」
羅魅が舞久に朝御飯を食べさしていた。
舞久はそれを食べる。
「おいしい？おいしいよね？！」羅魅は包丁を右手に持っている。
舞久はその包丁を見ながら今日の朝の事をフラッシュバックする。
――――――――――
俺と羅魅は一緒の部屋だ。まあ４人部屋を２人で使うのは気が引けるが、
まあそんなわけで羅魅が俺を起こすのは普通だ。
だがその起こし方がサンタが子供達に縛られている光景を見たトナカイの驚愕さぐらいヤバイものだ。
「お兄ちゃん起きて～」
「あともう少しで起きるから」「あともう少しってどれくらい？」
「知らね」
キィン　キィン
鉄が擦れる音がする。
それに舞久は目を開けると「起きなかったら、刺すよ」「うわ～、今日もいい天気だ」「カーテン閉まってるよ」誰かカーテン開けとけよ！！
――――――――――

そして今は手を縛られ、食堂で朝御飯を食っている。いや食べさせられている。周りにいる生徒達は全く寄って来ない。助けろよ！誰か助けてくれ！！

「お兄ちゃん、全部食べなきゃ」羅魅は包丁をアピールして急かす。これは最早脅迫だ。

「もう実践してるんだ？」空理が１人こちらにやって来た。社と夜音は一緒ではない。

「お前、社と夜音は一緒じゃないのか？」「社は保健室で夜音はその付き添い」社は聖杯合戦で負った傷がまだ治っておらず保健室に通っている。まあ、あんな重傷を負ったらそうなるわな、「私…」と羅魅が落ち込みながら言う。

羅魅は社達を傷つけたことに負い目を感じていた。

社達は許していたが羅魅はまだ気にしていた。

「子供が気にしないの、仕方ないんだから」空理が羅魅の頭を撫でながら慰める。「そういえば、実践て何なんだ？」舞久が空理が来た時に言っていた真意を訊くと空理は「舞が言うこと聞かなかったら包丁で脅せばいいよって羅魅ちゃんに言ってたの」と応えた。

「お前が主犯かあああああ！！」舞久の声がこだました。

――――――――

朝食を食べ終わり、教室に向かう。舞久達のことは神野先生が説明してくれた。羅魅が狩人だとは言ってないが、舞久と守が融合体だったことは告げた。すると一瞬でセミナリオ中に広まった。とくに聖杯を手に入れた舞久はいろんな部活や委員会に勧誘されたがすべて断った。

教室に向かっている途中に放送が流れた。

〈子無舞久君は今すぐに生徒会室に来て下さい〉

舞久はいやな予感しかしなかったがとりあえず行くことにした。
羅魅と空理はさきに教室に行き、舞久は生徒会室に走って行く。すると見覚えのある扉が見えた。取っ手に髑髏が付いているいかにも魔女の家を思わせる陰気臭い扉を舞久は開ける。
前のこともあったので警戒して入るが何もなかった。「おお！来た、来た」
生徒会会長代々神照がメイド服を着て丸テーブルの椅子に座っている。
右から着物を着た生徒会書記の神都愛有、凄いいかつい顔をした男にシンデレラのような格好をした女性、そしてなんか格好いい仮面をつけた女性が座っていた。キャラが濃すぎるこの空間に舞久は唖然としていた「うーん、意外に端正な面持ちをしてるな～」
照がまじまじと舞久の顔を見ている。
「あの何か用ですか？」
舞久が用件を聞くと、照は満面の笑みで応えた。
「生徒会に入りなさい！！」「いや、別にいいです」舞久は間髪入れずに応えた。

第二章―レギオン（後書き）

マンガも描いているのでどうしても1話ずつになってしまいがちですがどうぞこれからもお読みください

生徒会との波乱（前書き）

第二章は生徒会役員との絡みを重視してます。あと今回は真面目にガチバトルです。それでは長いですがお読みください。

生徒会との波乱

「そう言うと思った」
照は椅子から立ち上がる。そして窓際に立ちカチューシャを外す。
舞久は何かからくりを発動させるんじゃないかと警戒していたがそのような事態は起こらない暫く、何も起きなかったがシンデレラのような格好をした女性が舞久の裾を引っ張る。
「あの子、拗ねてるわね、あなたの責任よ」
照を見るとカチューシャを弄りながらグチグチ何か言っている。ある意味目の保養になる光景だがかなり拗ねている。
「俺の責任って、俺は生徒会に入れと言われて断っただけだ」舞久は抗議する。すると、
「ちょっとあなた今タメ口でしゃべったでしょ！私はお嬢様よ！！能無し！！」なんだ？こいつ、うぜーな「あなた、今うざいって思ったでしょ！」
「お前よく見るとツインテールに髪纏めてるな」
「それがどうしたのよ？」舞久はその問に
「愚問だな、お姫様の格好してツインテールに髪纏めてる奴はツンデレと相場は決まってんだよ！」
と指を差して言った。
「あなた、私が生徒会庶務世良神松露（せらかみまつろ）と知ってて言っているの」松露は腕を組みながら舞久を睨む。
世良神松露はセミナリオの入試で最高得点を叩き出し新入生主席で入学した生徒であり魔法技術も高位に位置し能力値もＡＣＥという模範生だ。だが舞久は転校生してきた身でありそんなことは認識していなかった。「ごめん、俺お前のこと知らないんだが」
「な、何なの？！あなた調子に乗ってるでしょ！」
「乗ってないし興味もないしもう帰っていい？」
松露は堪忍袋の緒が切れたのか、瞳孔を思い切り開いて、「会長！

！」と叫んだ。
照は驚いてカチューシャを落としてしまったがすぐに拾い上げて
「何？私拗ねてないから」素頓狂な事を照は応えるが松露は気にせずに
「今から私と子無舞久は模擬戦をします！」
「はあ？！お前何言って「そして！子無舞久が私に負けたら生徒会に入り雑用係勝ったら生徒会に入ることを免除！！どうでしょうか、会長！！」松露は舞久の言葉を遮り、照に提案する。「だから、勝手に言ってんじゃ「いいわね！マツロン！それで行きましょう、早速準備しなくちゃ」照はカチューシャを着け直し、闘技場に向かう。松露も「首洗って待ってなさい」と常套句を言って闘技場に行く。
部屋に残っていた愛有に
「もし、生徒会に入るとなったら俺って何するんですか？」と聞いてみると愛有はテーブルの上に置いてあった紙を舞久に手渡した。紙上には“雑用係”と書かれていた。
「わざと負けてくれへん？」と愛有が言って来る。
だが舞久は紙を強く握り、「無理ですね、力の加減はできません」と声を震わせながら応える。

――――――――――

闘技場

ローマの遺跡のコロセウムを彷彿とさせる造りをしている。生徒はほとんど闘技場のことをコロッセオと言っている。そのコロッセオで舞久と松露だけが立っている。舞久は聖杯の剣を松露はランスを持っている。
「聖杯の剣を持っていることは凄いことよ、でも使いこなせてなかったら意味はない」「うるせえよ、お前の武器だってちゃんと振り回せんのか？」
「一つ教えてあげるわ。こういう召喚した武器をレギオンって言う

の。覚えときなさい」松露はランスを高く持ちながら言う。あの細い腕でかなり重量のあるランスを持っているのはすごい。

〈試合開始するけどいいかしら〉照の言葉に

「いいです」「準備はできた」2人は各々応える。

〈それじゃあ…〉

照が間を開ける。

風の音しか聞こえなくなる静寂が訪れ、時間が止まったかのような空間が支配する。そして

〈開始！！〉

戦いの火蓋が切って落とされた。

「一気に潰してあげる！」松露はランスを舞久に向けて投げてきた。意外に速度が速く驚いたが難なく避ける。だがランスが舞久の顔の横を通りすぎる瞬間にランスに手が握られていた。「嘘だろ…」

松露が一瞬で舞久の横に移動していた。

「一瞬だったわね」

松露は勝利を確信した表情でランスを舞久に突き刺した。だが、舞久の姿が視界から消えた。

「くっ、どこに」

「セイント　ア　フラッシュ《聖者の一閃》」

上空から白の剣が何本も降ってくる。

「こんなもの！」

松露はランスを横に薙ぎ剣を砕くが剣の破片が急速に松露の背後に移動する。

「後ろがら空きだぜ」

舞久が後ろに周り剣を斬りつける。

キィン

松露のランスに激突し、鋭い音が鳴る。

「意外に粘るわね」

「まだ始まったばかりだぜっ！！」舞久は剣を振り上げ後ろに跳び

距離を空ける
ランスってのがきついな、リーチが長い分攻撃範囲は広い。まあ当たり前だがなとなると遠距離魔法になるが生憎俺にはそういう類の魔法は持ち合わせていないじゃあ、どうする？
「どうしたの？もしかして次はどうやって仕掛けようか考えてる？」嫌らしい笑みを浮かべながら松露が話しかけてくる。
「いや、もう決まった」
舞久は脚を前に踏み出し、魔方陣を脚に形成する。
「まさか移動魔法で私に斬りかかるつもり？そんなんで私を倒せ「移動魔法じゃない。それなら足に魔方陣形成するさ」何をするつもりなの？移動魔法じゃないとしたら
「跳ぶんだよ」
舞久は魔法を発動させ、天高く跳躍する。地上からでは舞久を確認することができない。
「かなり跳んだがここからなら」舞久は雲がある高さにいるが恐怖心はない。そのまま空気抵抗を減らし、垂直に落ちる。
「あいつ、何を？」
松露が上空を見上げていると舞久が落ちてくる。
ただし、頭から垂直に
「来なさい、蹴散らしてやる」松露はランスに魔方陣を複数形成する。落ちてくる舞久を一撃で仕留めるためだ。
「ふん、意味ねえよ、そんなことしても」舞久は剣を前に突き出した。
「フラッバーガステッド《白雷の霹靂》」
舞久の周りに《聖者の一閃》よりも沢山の剣が出現して落ちていく
「こういう技で攻撃してみたかったんだよ」
剣はどんどん落ちていく
一方地上では
「何よ！もう多すぎ！！」松露は防御魔法で防いでいるが剣の多さに苛ついている。前が剣で確認することができない。舞久がいつ落

ちてくるのかわからない。「これじゃ、ちょっとヤバいかも」と松露がそう呟いた時防御魔法が破られ、舞久の姿が現れる。聖杯の剣が松露の首を突こうとしていたが勢いが止まり寸でのところで止まる。

「勝負ありだ」

その言葉の後に

〈勝負あり、勝者子「まだです！」照の宣言を松露が遮る。松露はまだランスを構えている。

「まだ！詠唱魔法を出していない！」詠唱魔法ってすごい強い技じゃなかったっけ？と舞久が思い出していると「マツロン！詠唱魔法は駄目よ！」照が警告しているが松露は無視しランスを縦にして前に突き出す。すると、赤いオーラのようなものがランスを覆う。そして、詠唱が始まる。

「赤色の運河が渺渺としている。彼らに助力を仰ごうとも生命を刈る彼らには愚弄する事変を背負い続けるだろう、第一詠唱魔法！龍宮特効軍」詠唱が終わり、ランスは元に戻っている。

ただし、空が赤く染まっている。

〈舞君、死なないでねえ〉と照が言っているがよく分からない。だが赤い空に円い穴が空きそこから3頭の人型の龍が降りてきた。

照の言っていたことは把握した。確かにあれはヤバイ一頭につき、物凄い覇気を纏っている。

「これで私の勝ちよ、覚悟しなさい、あの龍は一頭ずつ能力値はKINGよ」

嘘だろ、セルジュニアばりの力があんのか？あの龍は

一頭の龍が舞久を見る。

舞久は少し鳥肌が立ったが剣を構える。

サッ

「えっ？」

三頭の龍は移動魔法で舞久のそばまで移動し、舞久を囲んだ。逃げ場はない。

「ヤバイかも、これは」
龍が手にしている斧を振り上げて
ドッオオン
舞久目がけて振り下ろした。煙が立ち込めて舞久の姿は見当たらない。
龍達は松露の所に移動する松露は完全に勝利を確信した。「会長、勝負ありです」一時はどうなるかとおもったけど、私には勝てないのよ！
「まだ…だ。終わってない！！」舞久の声が煙から聞こえてくる。
「え、嘘…でしょ、直に攻撃を食らったのよ」松露は驚駭する。龍達の攻撃は小規模のクレーターができるくらいの威力だ。それを3倍食らったことになる。つまりそれを受け止めたことになる。
煙が晴れて、舞久の姿が認識できる。舞久は右手を重傷している。頭からも出血しているが右手はもう動かないだろう。
舞久は剣を左手に持ちかえる。
「まだ戦うつもり？もうやめた方がいいんじゃ」
血だらけで立っている舞久を見て松露の心は揺らぐ。だが舞久が言った言葉に松露は怪訝な顔をする。
「俺も詠唱魔法できるぜ」舞久は剣を地面に突き刺す魔方陣が前方に形成される「本当なの？嘘なんじゃ」松露は舞久がふざけているんだと思ったがこの状況でそんな血迷ったことはしない。
舞久は剣を地面から抜き、詠唱を始める。
「彼女は旅人に問う。聖杯を守護する者には裏切りの剣を、聖杯を奪う者には強欲の剣を、そして聖杯を見守る者には聖者の剣を汝はどの剣を手にする、聖属詠唱魔法、聖杯の救援」
魔方陣が光り輝く。
そこに人間の型をしたシルエットが浮かび上がり、認識できるほどに鮮明化する「そいつは…ここには存在しないはず」
松露は視界にいる人間の存在を信じることはできない
詠唱魔法により召喚された人間は白い髪した女性の姿をしている。

手には聖杯の剣が握られている。
その女性は舞久と守の融合体である
「少し頼んだ。あの龍達を倒してくれ」「分かりました。叩き潰してさしあげましょう」
子無舞だった。

聖杯を守護する騎士―クレチアン

「なぜ、ここに子無舞がいるの？」子無舞は融合体、子無舞久が存在することでその個体は消え去るはずなのになんでここに？
「さあ、なんでだろうなあでも、考えてる時間は与えないぜ」舞久は足に魔方陣を形成し、移動魔法を発動させる。その一連の動きを一瞬でやり遂げ松露がいる所へ移動する。
龍達が舞久を止めようとするがそれを子無舞が止める「大変恐れ入りますが貴方たちを叩き潰させていただきます」
その間に舞久は松露に攻撃する。
キィン！
だが松露は顔色一つ変えずにそれを受け止める。
「あなた、私を馬鹿にしてる？片手で私とまともに戦えると思ってるの？」
舞久の右手はもう動かすことはできない。それに利き腕ではない左手で剣を振るっている。ハンデとは言い難い状況だ。
「馬鹿にした覚えはないしまともに戦えるとも思ってない、それに…」舞久は左手に魔方陣を乱雑に形成する。物凄い速度に松露は目を見張る。
「諦めるつもりもない」
魔方陣をすべて発動させる松露に多大な重圧が襲う。「く…うぅ…」呻き声を上げ、それに堪える。魔方陣が消えて行く毎に重圧が力を増す。
「龍宮！！早くその女を潰して助けに…」
松露は危険を感じて龍達に助けを求めようとしたが途中で黙ってしまう。
なぜなら龍達は子無舞に切り刻まれて横たわっていたからだ。
子無舞はあれ程龍達を切り刻んでいるのに平気な顔をして白い髪には血が一滴も付いていなかった。

「失礼ですが、弱すぎでしょう、この龍ちゃん達」
「嘘…」
松露はランスを握っていた手を離してしまう。
舞久も剣をしまい
「今度こそ、勝負ありでいいな」と言った。
「うん、私の負けよ」
松露はその場に座り込み、地面を凝視している。肩を震わせながら泣いている。舞久は右手を押さえ、聖杯の剣をしまう。
「嬉しいでしょ、私に勝てて」松露は拳を握っている。血が出るほど握っている舞久は松露に背を向けて歩き出す。子無舞は舞久の後に付いていく。「いいのですか？何も言わないで」
子無舞が松露を見ながら、言ってくる。それに舞久は「今はそっとしておいてやることが一番だ」後ろを振り向かずに歩く。
コロッセオを後にし、ひとまず医務室に行こうとしたが照が舞久の所にやって来る。
「舞君、すごい怪我してるじゃない！すぐに生徒会室に行って！」
え？医務室じゃないの？
「仮面被った子に治してもらいなさい、医務室に行くよりそっちの方が早いから！」照は慌てながら、そう告げてコロッセオに入っていった。嵐が過ぎ去った後のように静かになる。
今思うと授業中だから生徒は教室から出ていない。静かなのも当然だ。
「まあ授業サボれるしいいかな」舞久がなんとなく呟いた。
「今なんとおっしゃいましたか？子供はちゃんと勉学をせねばなりませんのに」子無舞は優等生のような戯言を言ってくる。
舞久は無視して生徒会に向かう。

――――――――

生徒会に着いて、扉を開ける。円テーブルの所に仮面の女と愛有が

座っていた。舞久の怪我を見て2人は驚いた表情を見せたが舞久の後に入って来た子無舞の姿を見て驚愕する。
仮面の女は舞久を椅子に座らせて治癒を開始する。

「激闘しててんなあ、松露はどこにいるんや？」
愛有は子無舞の姿をちらちら見ながら聞いてくる。
「まだコロッセオに居ます」と松露が泣いていることは言わないで置いた。
愛有は椅子から立ち、
「コーヒー淹れるわね、砂糖いる？」と訊いてきた。「角砂糖４個でお願いします」舞久の注文に愛有は笑顔になり「あんたも甘党なんや」と言いコーヒーを淹れる。着物を着た女性がコーヒーを淹れる姿はどこか新鮮な光景で見ていて飽きない。右手の治癒は終わりかけていた。照の言った通り医務室より早い。
「ありがとな、お陰で全快だ」と舞久は肩は回しながらお礼を言う。
「これくらい問題ないよ。それに妹が世話になっているようだしさ」と仮面の女が応えた。「妹？」舞久は見当がつかない。
「名前を言う方が早いね、私は九神(ゆいん)癒音、ランクはＫＩＮＧ、そして夜音とは双子よ」
「そうなのか、双子だったんだな」舞久は癒音の仮面をみる。もしかして双子合わせてアニメオタクか？仮面着けてるし
「あとこの仮面は私の力を抑制させるものなの、だから外せないのね、まあ顔は夜音と同じだから」
厨二かと舞久は思ったが
「本当やで、癒音は珍しい体質しててなあ、力を溜め込む性質があるんや、例えるんやったら霊感ある人間の周りに霊が沢山寄って来るみたいな感じや」愛有がコーヒーをテーブルに置きながら説明する。
「そうなの、だから決して厨二だとかそういうことじゃないからね！」癒音が必死に弁解する。「分かった、分かった、でもその仮面

どっかのアニメであったような」舞久が記憶を辿る。確か夜音が見てたアニメに出てたような気がする。
「この仮面は夜音からもらって力を抑制できるように改造したの」
癒音は仮面を撫でながら言う。
「仲良しなんだな、お前達」舞久がそう言うと、癒音は少し照れる仕草をする。
そうやって雑談をしていると扉が開き、照が部屋に入ってくる。
「もう怪我は治ったね、それじゃ、説明してよ？」
照は椅子に座り、子無舞を指差す。
「ちょっと貴方申し上げますけど、人に指を突き付けるなと親に習わなかったのでしょうか？」と子無舞は不機嫌になる。
「やめろ、ややこしくなるだろ」舞久が言葉でなだめかす。「ん…はあ、分かりました」

舞久は椅子から立ち上がり子無舞の横に立つ。
「最初に言っておきますがこいつは子無舞じゃないです」舞久は3人の反応を見るが表情は普通だ。まあここまでは誰でも分かる。なら正体が何なのかだ。
そして舞久は正体を告げる
「こいつは聖杯を守護する騎士、クレチアンです」
「どうも聖杯の騎士、クレチアンです」
クレチアンは笑顔で応えた

修行開始（前書き）

今回はふざけました

修行開始

舞久のクレチアンとの出会いの回想にお付き合い下さい。

――――――――――――林間学校が終わってまた普通に学園生活を送ることになった。聖杯合戦も無事終わり元の体に戻り羅魅も戻って来た。端から見たら、第二章に行く前のちょっとした日常描写に見えるだろう。俺もその暮らしをしたかった。ハーレムとか体験したかった。男なら誰でも憧れるだろう。だが俺には一つやり残したことがあった。それは

「聖杯の剣って何なの？」聖杯の剣には特殊な能力があるらしい。そりゃ聖杯なんていういかにも強そうな名前を背負ってるんだ。能力一つぐらいなかったらおかしい。そして、俺は今ホテルの部屋にいる。羅魅も同じ部屋だがもう寝ている。まあ子供はもう寝る時間だからな。俺は時計を見る。夜の9時に針が向いている。「寝るの早くね、小学生でももう少し遅いよ」

まあ、疲れてるんだろう、さて本題に戻ろう。

まず俺が言いたいのは、聖杯の剣の使い方が知りたい例え、特殊な能力があったとしてもそれを使いこなすことができなければ宝の持ち腐れだ。

都合よく聖杯の剣について教えてくれる人なんて現れることはない。つまり俺は修行相手を探している。マンガやゲームでも主人公が修行する時は必ず先駆者が教えてくれる。都合よく現れていいよね、教えてくれる人が最初から居てさと思ったが二次元の奴らに三次元が勝てるはずがない。二次元には設定という最強の運命があるんだからな、そうだ、俺は甘えてただけだ、どんなに精神年齢が向上しても俺達の世代はゆとりという呪いからは解かれない。

「取り敢えず、訓練場に行くか」俺はひとまず部屋を後にした。

訓練場に行ったがどうやって聖杯の剣を使いこなすか訓練場に行く間考えていたそして、思いついた。

「聖杯に直接聞けばいい」

だが聖杯に話しかけ、聖杯がそれに応えるのが重要だだが剣が言葉を発することは不可能だ。常識的にものが話すことはあり得ない。それこそ厨二的発言に他ならない。

だが俺にそんな忸怩を嫌悪する暇はない。羞恥という感情を押し殺すんだ。俺は聖杯の剣を召喚し剣を床に刺す。そして俺は意を決して話しかけた。

「聖杯さん、聞こえてる？聞こえてたら、はいと言ってください」

何も聞こえない。失敗かなと思ったがその思いは杞憂に終わる。

「はい」と声が聞こえた。確かにはいと応えた。

「あの聖杯さん、一つ聞きたいだけど聖杯の剣の説明とかしてくれない？」

「はい、分かりました。

聖杯の剣はイエス・キリストが作った聖杯を1人の少年が斬りました。少年の武器は二刀流、少年の剣には斬った聖杯の破片がまとわりつき、聖杯の剣に変化を遂げた、これが聖杯の剣の基本的な概要です」

「あのそういう説明じゃなくて聖杯の剣の基本的な取り扱い説明書とか何処にあるんでしょうか？」

「私は貴方の願いを叶えることができますが願いはありますか？」

「人の話聞いてた？説明書は何処にあるんだって訊いてるんだけど」

「貴方の願いはなんですか？」「てめえ、話聞けよ！説明書は何処にあるんだって訊いてんだよ！！」

「分かりました。説明書ですね、貴方の願いを叶えます」いきなり、聖杯の剣が光を灯し、俺の目の前に分厚い本が現れた。

本には“聖杯の剣攻略本”と書かれている。

「そこには聖杯の剣についてのすべてのことが書いてあります」
俺は攻略本を手に取り開いてみた。
「聖杯の剣は使いこなすことができれば、最強の名を冠することもできます」
「やった！これで強くなれる！」俺は修行を開始する今俺は自力で強くなろうとしている。
ざまあ見ろ
俺は二次元を越えた三次元の先駆者だ！！

次回　修行開始

修行終了

まだ回想は続きます

俺はまず攻略本の最初に書かれている技の使い方を練習していた。そこには《聖者の一閃》や《白雷の霹靂》などの技が載っていたが他に幾つもの技を練習する聖属攻撃魔法　聖属防御魔法　聖属移動魔法みたいな聖属性の各種魔法をこなして行くうちに一つの聖属性魔法に行き止まった

「聖属詠唱魔法か、強いのか？」聖属詠唱魔法の概要を読んでみたがとんでもないものだった。

聖属詠唱魔法は言わば、奥の手で使われる術式である聖属詠唱魔法では召喚できるものが限られている。だが召喚できる個数は３個、普通の詠唱魔法は１個だけしか召喚できない。聖属詠唱魔法は最強の技である。

「詠唱魔法覚えるしかないか」でも何を召喚すんの？ここには召喚するものは書かれていない。えっと、自分で考えんの？これ、待て待て、本当に分からんこれは剣に聞くしかないか「あのさ聖杯に聞きたいんだけど俺は何を召喚すればいいの？」

「えっ？攻略本に書かれていませんか？」「うん」

「すみません、ミスしました、その攻略本は私が造ったので」「へ～そうなんだ、すごいね」変だとは思ったんだ。そんな剣の説明書なんてあるわけないじゃん「それでですね、召喚できるのは３個、１つはイエスの聖剣、２つは死の熾烈、そして３つはわたくしです」

「3つ目気になるんだけど聖杯が召喚されんの？」
「いえ、違います。それに貴方はわたくしを聖杯と呼んでいますがわたくしは聖杯ではありません。わたくしは聖杯を守護する騎士クレチアンです」
「クレチアン？」
「はい、本名はパロック・クレチアン、イエス直属の聖杯守護騎士です」
イエス直属ってヤバくね？強すぎんじゃね？
「イエスキリスト知ってるの？会ったことあるの？」「はい！、それは、それは勇敢な方でした。皆から慕われていました！」
それはね、選ばれた人だからだよ、世界史で言ってたからね
「まあ、イエスのことはどこかで聞くとして、どうやってクレチを召喚すんの？」「クレチとはわたくしのことですか？」「クレチアンなんて呼びにくいしな、クレチでいいだろ」
「ええ、いいですけど…
貴方イエス様と同じ呼び方をされるのですね」
「ん、そうなのか？」
「はい…それではまず、わたくしを召喚するには貴方がわたくしに代わる器の記憶を頭の中に浮かばせてください」「器の記憶？」
「はい、わたくしが貴方の世界に立体として現れるには器、いわゆる、体が必要です、だけどわたくしは記憶から情報を抜き取り、それでそちらに召喚という形で出現できます…それでは記憶を探ってください」
人物の記憶か、実在する人間は駄目だよな、それにアニメのキャラクターも駄目だよなあ、早々、実在したけどいなくなった人間なんていな…い
いや、いたじゃないか！
実在したがもう今はいない俺に一番関わっていた人間が
「決まった。いつまでいいぜ」俺はあいつの姿を思い浮べる。何回も鏡で見ていた姿を思い浮べる。

「固定完了、召喚されに行きます」クレチがそう言って目の前が光で包まれる。眩しくて、目を覆った。
「完了しました。目を開けてください」俺はゆっくり目を開ける。最初はぼんやりしてたがどんどん鮮明になっていく。
「うあ…すげえ」
目の前にいる少女はすごく美人で可愛くて、綺麗だった。感嘆の声しか出ない。「ふふ、綺麗なお人です、貴方の彼女ですか？」
「違う、それは俺だ」
「えっ？それはどういう意味合いの言葉ですか？」
まずいこと言ったな、
俺は誤魔化しのつもりで剣をクレチに手渡す。
「これからよろしくな、パロック・クレチアン」
俺の手渡した剣をクレチは素直に受け取った。
「はい、分かりました。
子無舞久」
クレチは剣を大事に持つ。深い思い出が剣にあるのかは知らないがいい笑顔をしている。
「これからよろしくお願いします」クレチはそう言った。
俺はこれから強くなる！
修行して強くなって、仲間を守れる力を
俺は戦い続ける。

クレチと照

「まあ、これで聖杯もといクレチと出会いました」
舞久は回想を終了させて、椅子に座る。愛有に淹れてもらった角砂糖４個以上入っているもうコーヒーではなく甘汁と化したものを舞久は一口飲み、落ち着く。「つまり、子無舞の姿を借りたクレチアンということか、それなら納得がいく」照がいつになく真剣な口調で腕を組みながら呟いている。愛有も癒音も状況は把握しているようだ。
「でも良かった！女版舞君はすごくスタイルが最高だったし、いなくなったら惜しいなあって思ってたの！」照はクレチを指差して言う。クレチは少し眉間にしわを寄せたが思い留まる。舞久はまた怒るのではないかと危惧したが杞憂に終わる。「でさ、舞君～お願い聞いてくれない？」
照は椅子から立ち上がり、舞久に抱きつこうとするが「失礼ですが、舞久に触らないで下さい」とクレチが舞久の前に立ちはだかる。クレチは舞久を庇うように立っている。そうしたら、舞久が座っていると顔の位置にクレチの胸が目前というか顔に当たっている。
だが舞久は何も言わなかった。
「何？あなたどういうつもりぃ！」意外に照は怒っていた。カチューシャが燃えている。幻覚かと思ったが実際に燃えているようだ。
「わたくしは舞久の護衛もしています。だから貴方のような不健全な格好をしている人が近づけば、舞久の教育に劣悪なのです」
クレチは舞久を自分の元に引き寄せる。舞久の顔がクレチの胸に完璧に密着するだが舞久は何も言わない。寧ろ、このままでいいかなと思っている。
「あっ、ヤバイ鼻血出てきた、癒音ティッシュ取って」「黙れ、変態」「……」「メイド服を馬鹿にしたな！！血闘しなきゃ！！」
照は生徒会室を出ていく

クレチも舞久から離れて、生徒会室を後にした。
「はあ、本当に騒がしい、神都先輩ティッシュ取っていただけませんか？」
「話しかけんといて、変態野郎」
舞久は椅子から立ち上がり、扉に向かう。
「今日もいい天気ですね」「カーテン閉めてる」
だからなんで閉まってんだよ！！
舞久は生徒会室を出て、全速力で走った。
「というか俺、生徒会入らなくていいの？」

―――――――――――――

正午過ぎ
守と羅魅そして夜音と社と空理は食堂で昼食をしていた。

「お兄ちゃん、今日教室に来なかったんですが、何かあったんでしょうか？」羅魅は心配した様子で言う。「まあ～大方生徒会長に振り回されてるよ！」社はカツ丼を咀嚼しながら応える。「だけど、いくらなんでも遅すぎじゃ」空理が懐中時計を眺めながら呟く。
「生徒会長の奔放さは皆よく知ってるだろう、多分戻ってくるのは夜だな」
夜音が羅魅の方を見ながら発言する。
「舞久は頼まれたら断れない性格してるからね」
守が羅魅の肩に手を置きながら言う。
「そうですか、それじゃ心配しなくていいですね」
羅魅は満面の笑みを浮かべながら言う。その姿が子犬のような仕草だった。
「もう、羅魅ちゃんはかわいいなあ、安心して、お姉さん達がいる

から」
社が立ち上がり、宣言する座っててもほぼ同じ高さだ。
食堂には壁にモニターがあり、あらゆる場所から映像が送られてくる。そのモニターに映像が流れる。食堂にいた全員の視線がモニターに向けられる。
モニターにはコロッセオが映っており、人物は照と子無舞の姿を模したクレチが映っている。
「なんで、いるの？もう、私達が戻ったことで存在しないはず」守はその光景に目を見張る。そして、食堂を出ていく。
「ちょっと守！皆、私達も行こう」空理が号令をかけ一行は食堂を後にした。

――――――――

舞久もモニターを見ていた「はあ、あいつら何やってんだ！俺が止めなきゃなんねえのに」舞久はコロッセオに向けて走り出す。だが人の往来が多すぎて、なかなか前に進めない。なのでひとまず窓から外に出る。後ろから声が聞こえるがお構いなしだ。外に出て、再び走る。コロッセオ付近に着いたが人だかりが激しく中に入るのは疎か、中を見ることもできない。
舞久は脚に魔方陣を形成し魔法を発動させる。松露戦でも使用した跳躍魔法だ。それでコロッセオの塀に上り、中を見ると、照とクレチが睨み合っていた。
「まだ、戦ってないな」
舞久は仲裁に入ろうとしたがその行為を一つの声に妨げられる。
「待てよ、こら！」
男の声だ。舞久はその声に振り返る。そこには生徒会室にいた顔がいかつい男が立っていた。
「あんた、生徒会の…」
「ああ、そうだ、俺は生徒会副会長十神鼇竜（とがみごうりゅう）ランクはＡＣＥ」十神

はガムをポケットから出して噛み、
「お前を瀕死状態にしに来たんだよ」と言った。

漆黒の殺戮獣は人間達を憎む

「瀕死状態って俺を殺しにきたんですか？」
最初見た時から危なそうな人とは思ってたんだよ
俺の属性を読む能力を甘く見るな。
「いや、実は代々神に頼まれてよお、お前を中に入れるなと言われたんだ」
頼まれて来たのか、
あの人抜かりないな、
「それでお前を入らせないためにお前を瀕死にさせるということだ」
いや、おかしいよね、中に入るのを止めろと言われて息の根を止めるという発想に行き着くか？この人殺戮本能しか残ってねえだろ
「邪魔しないでください、本当に止めないと大変なことなりますよ」
代々神会長も不世出の天才と言われてるくらいだし絶対強い。もしクレチと戦ったらコロッセオがぶっ壊れるんじゃないか？
「大丈夫だ、それも懸念してコロッセオに強力な障壁を張ってある」
確かに透明だが確りと張られてるな。
「何も心配はいらないだろさあ、俺と戦おうぜ」
「はあ、どうせ断っても意味ないしな、いいですよ、戦います」相手は副会長だ。難敵には違いない。クレチがいないのはちょっとキツいがやるしかない。
ピシッ
「ふっそれが聖杯の剣か、神神しい雰囲気を帯びていて強そうだな」
「そうですか？俺にはそうには見えないんだが」
「さて、じゃあ始めようぜ」「ん、あんた、丸腰で戦うんですか？」
レギオンなしで戦うのはいくらなんでも舐めすぎだろ。
「何いってんだあ、俺のレギオンは頭脳だ」
頭脳？え？戦いってクイズ大会なの？

「まあ、戦ったら分かるぜちなみに俺は数学オリンピック1位なんだよ」
「数学オリンピック？」
「じゃあ始めようぜ」

――――――――――
野次馬がコロッセオの観客席を埋めつくしている。
そこに守達も来ていた。
守はクレチを見て、なぜか腹が立っていた。当然守はクレチの存在は認識していないが舞久がやったということは分かっている。
だからコロッセオに舞久がいると思って急いで来たのだが舞久はいなかった。
「お兄ちゃん、いませんね、どこにいるのかな？」
羅魅はコロッセオを見渡して言う。だがコロッセオは東京ドームよりも3倍広い。そこから一人の人間を見つけるのは無理だ。だから今は守と羅魅、空理と夜音と社に別れて、舞久を捜している。
「舞久は後で死刑よ！」　守は怒りを露にしている。
――――――――――
「もう一度言うけど～メイド服着てみない？」
「だからそのような服は着ません。メイド服というものはそのような華美な彩色は施されていません」
本当にはしたない、現代の人々はこのような服を着るのが慣習なのですか。
「舞君はクレチーに着て欲しいって言うと思うよ？」何と？！舞久もそのような素行の悪いことを！これは由々しき事態です、教育しなければなりません。
「言語道断です、一触即発します！あなたを」
すべての元凶はこの女、この女さえ潰せば

「いいよ～、じゃあクレチーが負けたら罰ゲームね」「いいでしょう、わたくし賭け勝負では最強を誇っておりますから」
「では～勝負しよドオン！！
爆音が鳴り響く。轟音とも取れるその音源はコロッセオの屋上からだ。
野次馬達は一斉にそちらに顔を上げる。
クレチと照も屋上を見た。照は舞久が止めに来たのだと認識していたため見上げるまでは冷静でいた。
だが視界に“それ”が入った瞬間驚駭する。

「あれは?！舞久！！」
クレチが叫んでいる。
だが声音には怒りが滲んでいる。
「あれほど、警告したのに…」
野次馬達が騒ぎまくる。
そこには恐怖も混じっている。

「代々神ー、これは情報になかったぜ」十神が頭から大量に出血している。今すぐ治癒しないと危険な状態た。

「ああ～うるせえな」
気だるそうな怠惰な声が聞こえた。
十神の横にいる舞久からだが容姿が全然違う。
獣のような爪に紺色の双翼と頭に2対の白い角が生えている。

「斬殺してやろうか」
舞久は瞳孔の開いた瞳でコロッセオを見下ろしていた

死の具現化（前書き）

ふと思いました。
この物語のヒロインって誰が良いのか、ヒロイン増やしすぎて分かりません。

死の具現化

「数学オリンピック？」
なんだったっけ？
「じゃあ始めようぜ」
十神の言葉で戦闘が始まる。だが十神は攻撃をする素振りを見せない。隙を狙っているのかどうかは分からないが舞久は先手を撃つことを決める。
「俺から行かせてもらいますよ、副会長」
舞久はそう宣言するが十神は何も応えない。ただ突っ立っているだけだ。舞久は気にせず瞬時に《高速の脚力》を発動させて十神に迫る。「おお、なかなか速いじゃないか、だがこれには追いつけないだろ？」ピシッ　十神がスナップを響かせる。それとほぼ同時に舞久のいる左右に魔方陣が出現し、閃光が放たれた。
「嘘だろ！ヤバイって！」舞久は驚駭するが寸でのところで避ける。閃光が目前を急速に過ぎていく。
舞久は魔方陣を横目で一瞬見てから後ろに退避した。「今のは…」今副会長が発動させた魔法はいやに正確すぎる。魔方陣の角度や距離はどう意識しても少しずれてしまう。なぜなら、魔方陣を形成して魔法を放つが魔方陣を形成する際威力や距離などをほぼ感覚的に決定しているからだ。
だが十神が発動させた魔法は全く乱れていなかった。「気付いたみたいだな」十神は髪を掻き上げながら言う。その表情はどこか嬉々としている。「あんたが数学オリンピックがなんとか言ってた意味が分かりましたよ」「ふっ、お前意外と分析力がありやがるな、まあ俺は魔法を演算で発動させてんだよ」「演算て人間の脳みたいな矮小な能力でできるわけないでしょう？」いくらなんでも無理がある。数学オリンピック1位だからと言ってもそれは人間族での話だ。
「そりゃあな、脳がパンクしちまう。だから俺はアペレイシュンブ

レイン《演算頭脳》っつう魔法を常時発動させてる、これで脳の機能を上昇させて、人間には不可能な演算を可能にすることができる、それにアペレイシュンブレインのおかげで俺の視ている世界はすべて数字が飛び交っている。だからお前の体重・身長も分かるんだよ」おい、マジかよ、プライバシーが脅かされてるぜ。「演算ていうのは感覚よりも完璧に正確だ。計算を間違わない限りだがな、そして演算の利点は必ず殺せる魔法を発動させることができるということだ」つまりいつでも一撃必殺の技が繰り出せるていうわけだ。どんだけチート能力だよ「こんだけ、手の内晒したんだ、少しは愉しませてくれよなあ」十神は魔法を即座に発動させる。舞久は身構えて攻撃に備える。

「真空は知ってるよな、原子と原子の空間が真空の概念だが真空も演算で生成することができる」十神がそう言うと、舞久を魔方陣が全方位で囲んだ。すると、突然、舞久が蹲る。「はうっ、ぐっ」息ができない！まさかもう真空状態にしたって言うのか？早すぎだ。「真空じゃ酸素は存在しないからなあ、そりゃ苦しいのも当然だ、だがもう少しこのままでいてもらうぜ」「はっ、はっ」舞久は息をするので精一杯だが真空状態のためそれはかなわない。時間が経つにつれ、舞久は動かなくなる。脳に酸素が行き渡ってないからだ。そして、舞久は動かなくなった。「ん、死んだか？おいおい困るぜ」十神は舞久を囲んでいる魔方陣を解き近づいていく。すると

「嘘だよ、古典的な演技にだまされんじゃねえよ」

舞久が虚ろな目でだけれど確りした目で十神を睨む。副会長に勝つにはあれしかないな。

舞久は剣を地面に突き刺す「なんだあ？どうするつもりだ？」十神が怪訝そうに眺める。舞久は剣を強く握りながら“詠唱”を開始する。「人は5の感情を持っている。喜び、悲しみ、怒り、快楽、嫉妬。漆黒の獣は月を眺め、人に恍惚の感情を放つ。だが彼は必ず人に絶望し死を望むだろう。第二詠唱魔法、死の熾烈」直後、舞久を漆黒のオーラが包む。唯、黒いだけの物体、それは絶望というより

死を具現化するようなものだ。「なんだ？これは！！冗談じゃないぜ！！」雰囲気で分かる。こんなもん間近で見ればすぐにだ。

漆黒のオーラが消え、舞久が現れる。だがそこにいるのは漆黒の獣、人間の姿をしているがもうそれは舞久ではない。

「酸素を無くすとかそんな生ぬるい殺し方してんじゃねえよ、クソガキ！」

舞久はそう叫び、右手を前に突き出した。魔方陣を形成するが魔方陣の色は黒色だ。魔方陣の黒色は存在しない。舞久は突き刺していた聖杯の剣を取り、魔方陣の中心に突き刺した。

「死を希求しろ」

そして、舞久の前方の事象は漆黒の炎下に晒された。十神は防御魔法で防いだが完全に防ぐことができなかった。十神のアペレイシュンブレインでも防ぐことができなかった。

「ギャハハハハハ！！！」完全に殺戮獣と化した舞久の叫び声が響いた。

兄と妹

「あれは何なの？舞君っていうことは分かるけど…」「あれは第二詠唱魔法、死の熾烈。人間を恨み続けた漆黒の殺戮獣を召喚する魔法です。しかし殺戮獣を召喚には経験してきた感情を捧げなければなりません」「それって結構ヤバいんじゃないの？」照が舞久を見上げながら言う。

「いえ、殺戮獣に屈しない精神を持っていれば体を乗っ取られることはありません、でも舞久にはまだ無理だったみたいです」クレチは照に向き直り「もうああなっては止めることは出来ません。だから舞久を…」クレチは悔しそうな表情を浮かべる。もう舞久を殺さずに救う術を持っていない。自分の非力さを憎む。イエスに仕えた騎士であるのにと、そしてクレチは「殺しましょう」と言った。

「でも！」「でもじゃない！！」照が意義しようとしたがクレチが止める。照は舞久を殺したくないと思っている。当たり前の反応だ。クレチもそれは認識している。「やはりまだ子供ということですね」クレチは照に背を向け、そう吐き捨てる。クレチは生前ずっと戦禍の最中で生きていた。仲間がそばで倒れようとも進み続けた。そうしなければ祖国を破壊される。仲間に気後れする暇などなかった。そういう環境で生きてきたクレチはどれほどの残酷な中でも動揺することはなかった。

「もし戦っている間に解決策が見つかればいいのですが…」クレチは僅かな希望に賭ける。クレチは剣を握りしめ「行きますよ」移動魔法を使わずに凄い速度で舞久に斬りかかる。舞久は剣で難なく防ぐ。「なんだ？弱すぎだぜ」「さあ、それはどうでしょう？」クレチは剣に補助魔法をかけて威力を上昇させて斬りつける。だが舞久に素手で受け止められた。クレチは殺せるほどに強化したが死の熾烈により強くなった舞久には歯が立たなかった。

「で？それがどうした？」舞久は睨みつける。絶望を与えるような

でも悲しさが滲む目でクレチを見る。
「舞…久…あなた！」
「邪魔だ！」舞久は剣を振りかぶり、クレチを遠ざける。クレチは後退し斬撃を避ける。舞久の様子がおかしくなる。胸を押さえて蹲る。「くっ、こいつの経験した感情は傑作だ！親を亡くして深い絶望に捕らわれていやがる」「親を亡くした？どういう…」クレチは舞久の過去のことは何も知らない。舞久が幼い頃にもう親を亡くし、妹を守らなければならないという重圧にかられた人生をクレチは知らなかった。
「俺はこういう感情を待ってたんだ！！絶望に縛り付けられた感情を！！」
ズドオン
コロッセオに張られた障壁が破壊された。完璧に設定された障壁を破壊したのは羅魅だった。
「お兄ちゃん！！」羅魅は泣きながら舞久の元に走る。つまずきながらも涙で前が見えなくなっても舞久の元へ走り続ける。舞久は剣で羅魅を斬ろうとするが動きが止まる。「なんでだ？！動けよ！！」
「お兄ちゃん！！」羅魅が勢いよく舞久に抱きつく。舞久は後ろに少しよろめく。
「お兄ちゃん、ごめんね…羅魅が重荷になって迷惑かけてお兄ちゃんのこと全く考えてなくてごめんなさい…」羅魅は俯きながら言う。自分のせいで舞久がこんな姿になってしまったと羅魅は思っている。羅魅は舞久を強く抱き締める。すると羅魅の頭に舞久の手が置かれる。「お前を重荷に感じたことなんて一度もない」本物の舞久が言う。「お兄…ちゃん」「大事な妹を世界でたった1人の家族を見捨てるわけないだろ」舞久は羅魅の頭を撫でながら言う。舞久に生えていた獣のような爪や翼が砂のように霧散して消えていく。服は破けているが普通の姿に戻っている。「お兄ちゃん、良かった…」「悪かったな心配かけてでも…もう…」「え？ちょっと！」舞久は話してる途中で気絶してしまった。そのまま羅魅にもたれかかる。「

もう、今日だけだよ」羅魅は涙を拭きながらそう言った。

――――――――――

校舎の最上階には校長室が点在している。規定上校長室には理事長と各学年主任しか入ることは許されない。秘匿情報が多数存在するからである。その校長室に４０代くらいの男が椅子に座ってモニターを見ている。部屋の電気はついておらずモニターの光だけが薄暗く部屋を灯していた。

「もう、来てしまったか」男はモニターの電源を切る。部屋は完全に真っ暗になる。壁は防音対策をしていて部屋の中は無音状態、静寂だけが部屋を満たしている。「本当によく似ている。やはりお前の息子だよ、満久」男は暗闇の中で呟いた。

両親の思い

夕方の学校の廊下はいやに切実な風景だ。きつね色の夕日の光が窓越しから照射されている。歩く音が通常より大きく聞こえる。舞久は長く続く廊下を足に重りをつけた感覚を覚えながら歩いていく。なぜそんな気分かというと、校長室に呼ばれたからだ。原因はコロッセオでのことでファイナルアンサーだがどうにも落ち着かない。よく学校で悪事を働いて職員室で先生に怒られるのかなと思ったら校長室なんていう生徒から見たら最高司令官並の部屋に行く生徒の緊張感と同じだ。その緊張感を維持しながら校長室に向かっている舞久の前に守が立っていた。「どこに行くの？」「校長室だ、たぶん怒られるんじゃねえの？」「やっぱりね、怒られるに決まってるじゃない」「そうだよなあ…はあ…」舞久はため息をついて重い足取りで再び校長室に向かう。「まあ、着いていってあげるわよ」守も一緒に歩き出す。エレベーターに乗り最上階の校長室まで上昇する。その間に守が話しかけてきた。

「ねえ、コロッセオにいた私達の融合体は何なの？」「あれは聖杯の守護する騎士、クレチアンっていう奴が子無舞の体を借りてこの世界に現れることができる。まあ詠唱魔法の一つだけどな」「そう、でも私にも言ってくれれば良かったじゃない、幼馴染みなんだから」夕日のせいか、守が少し悲しんでいるように見えた。「ああ、そうだな、小さい頃から一緒にいたしな」守は小さい頃から一緒に遊んでいた。そして両親を亡くした時も守と守の親御さんに助けてもらった。本当にありがたかった。だからいつか恩返ししようと思っている。「うん、これからもだよ…」チンッエレベーターが最上階に着いた。最後の言葉は舞久には聞こえいなかった。舞久はそのままエレベーターを出て周りを見渡す。廊下は壁にある炎の灯りしかないためほとんど真っ暗だ。生徒会室より怪奇な雰囲気を帯びている。この学校にはユバーバでも住んでんじゃねえの？「じゃあ私は戻る

わね」「おう、ありがとな」エレベーターの扉が閉まって守の姿が見えなくなった。1人になって心細くなったが前に進み、校長室の扉の前に立つ。舞久は深呼吸してから扉をノックした。数秒経って「入りなさい」と声が聞こえた。舞久は言われた通りに扉を開けて部屋に入る。部屋の内装は派手といえば派手だが地味といえば地味なもの。おそらくこの部屋の灯りが殆どないからだろう。灯りは弱く光る燭台があり、一番奥に机が点在している。その机に男が1人座っている。舞久はそこまで歩いていく。「やあ、はじめまして、校長の神桂冬道(かみかつらふゆみち)だ」「こちらこそ、はじめまして」なんだ？てっきりすぐ怒られると思ったんだが「君はよく似ているな、父親似かな」「あの何を…」「今から言うことは君が今まで信じてきたことを覆すことになる、それでも聞くかい？」「…聞きます」正直何の話なのかは分かっている。だからなんで“俺”だけを呼んだのかもだ。神桂は舞久をソファーに座らせて一枚の写真を机に置いた。その写真には8人の男女が写っている。そこには舞久の両親も若い姿で写っている。「君の両親はセミナリオにいた、それはセミナリオの卒業式の時の写真だ」舞久は黙ったまま写真を凝視している「そしてそれぞれの部署に配属された。君の両親は同じ部署に入ったんだ。そして昇進して部隊長にまでなった頃彼らは結婚して君が生まれた。だがやはり子供が生まれると彼らはセミナリオを去った。生まれた君にセミナリオの存在を知らせないためだ。彼らは君にそんな人生を歩んでほしくないと言っていた」神桂は舞久を見る。舞久は顔を俯かせていて顔色を窺うことはできない。「だが、神界戦争という大規模な戦争が起きた。それは世界の命運を賭けた戦いだった。そのため君の両親は神界戦争に招集された。私はやめてくれと言った。彼らには子供達がいる。その時には羅魅ちゃんも産まれていた。君達はまだ幼い、両親が居なかったらかわいそうだと。だが君達の両親は承諾した。そして戦争に参加して死んだ」神桂は机に戻り引き出しから封筒を取り出す。それを舞久に渡した。「これは何ですか？」「君の両親の遺言書だ、私はもらってから一度も読んでいない。

本当は君が二十歳になってから渡してくれといわれたんだかな」舞久は封筒から紙を取り出した。紙上には短い文が書かれていた。

〔舞久に一つ言っておきたいことがある。父さんと母さんは死ぬ。世界を守るためにお前達を見捨てる。どうか恨まないでくれ。こうするしかないんだ。そしてお前に言っておく。お前は父さんと母さんの最高の息子だ〕舞久は読み終えて紙を封筒にしまう。「これは羅魅ちゃんに渡してくれ」その封筒には「羅魅へ」と書かれている。舞久は受け取りそのまま部屋から出ていく。「泣かないのかい？別に泣いていいんだ。君達の両親のことだからな」舞久は立ち止まり振り向く。「母さんに言われたんですよ、兄の役目は泣かないことだって」舞久は平然としているが声が震えていた。泣くのを我慢しようとしている。「そうか、ならもう行きなさい」舞久は一礼して部屋を後にした。「本当に強い子だ」神桂は扉を眺めながらそう言った。

エレベーターは相変わらず夕日に照らされて切なさが演出されている。「恨んでるわけないだろ…、恨んでたら涙なんか出ねえよ」母さんの優しさが好きだった。父さんの強さが憧れだった。その父さんと母さんが世界を救うために戦ったなら俺は誇りに思う。父さんと母さんのことを。

エレベーターがもうすぐで止まる。だから涙を拭いた。そして扉が開き、また廊下を歩きだした。

魔法は難しい教科だ（前書き）

今回は説明が重視です

魔法は難しい教科だ

魔法学校セミナリオに入学してやや２０日が経った。もともと入学したのが7月上旬であるため今日から夏休みということになった。正直神軍に対抗するために創設されたこの学校に夏休みなんていうものがあるのかと思っていたがこの学校の方針は兎に角、子供らしく生活することらしく案外生温い。しかも夏休みの課題がない。つまり夏休みの間ずっと怠けて居られる。ということで俺は田舎の少年みたいなわんぱくさを持ち合わせていないので冷房をガンガンに効かして部屋で寝ることにした。羅魅もいない。なんでいないのか知らないけど寝ることを咎めるものはいない。最高の環境なんだが今日はそうはいかない。俺には断ったら結構危ない用事があるので素早く制服に着替え部屋を飛び出した。では今俺はどこにいくのかと言うと生徒会室だ。あのコロッセオでの戦いですっかり忘れていたことがあった。あの時第二詠唱魔法・死の熾烈を発動させた俺が暴走する前に松露と生徒会の加入で戦っていた。そこで俺は聖杯の剣より第一詠唱魔法でクレチを呼び出し勝ったんだがなんやかんやで生徒会に加入させられていた。もう契約が済んでいる以上何を言っても無駄だ。そして夏休みに入ったのにわざわざ生徒会室に来たんだが部屋には俺と会長以外誰も居なかった。

――――――――――――

「お、お早い出勤ご苦労」照は敬礼のポーズをしながら言う。お馴染みのメイド服を着て敬礼とはなかなか趣向なものだ。「おはようございます、なぜ他の皆は居ないんですか？」舞久は会釈をして他のメンバーの行方を聞く。照は姿鏡の前に立ってカチューシャの位置をずらしながら「今日は皆は寝てるんじゃないかな、取り分け重要な活動はないしね」と言う。「じゃあなんで呼んだんですか、別に寝ててもあなた能力値のランクは何？」照は舞久の言葉を遮っ

て唐突に質問してきた。「え？」と舞久は言葉を零してしまったが「ＫＩＮＧですけど、それがどうしたんですか？」と応える。照はホワイトボードまで歩きその前に立つ。「あなたにはＡＣＥランクになってもらうよ」「そんな事どうやってするんですか？」舞久は取り敢えず椅子に座る。照は驚いた顔をしていた。もっと正確に言えば唖然とした表情を浮かべていた。「あなた、ちゃんと魔法の勉強してた？あっ、まさか授業中寝てたでしょ？！」「魔法ってよく分からないんですよね。種類とか沢山あるし応用になるともう無理です。ゲームは△と十字キー下で簡単に出来るのにな」舞久はゲームをしている動きをしながら愚痴っぽく言う。「ダメだ、こいつ早くなんとかしないと」照はマジックペンを取りホワイトボードに何かを書き始める。そこには「魔法」と書かれていた。照は「魔法」の文字をペンで叩く。「説明するよ、こんなんじゃ馬鹿になるからね」「簡単にお願いします」「うん、まず魔法は神の力で発動できる現象よ。もともと神の力を行使する事を人間は拒んでたんだけどこのままでは人類は神に支配されると危惧して神の力を行使するようになった。それが魔法の成り立ちね」照は一旦言い終えた後「魔法」の下に「属性」と書いた。「魔法には種類がある。その場に合わせた魔法がね」「攻撃魔法、防御魔法、環境魔法、移動魔法、回復魔法、拘束魔法、詠唱魔法でしたっけ」「意外に覚えてるね。まあ魔法にはあらゆる系統の魔法が存在する。そして何より属性があるということは重要よ。属性は炎、氷、風、水、地、雷、無がある。さらに魔方陣の色は属性によって様々なの。例えば、炎は赤、風は緑と言ったようにね」確か聖杯合戦で空理がそんなこと言ってたな「別に色が変わっても意味ないんじゃ…と思うだろうけどこれが意外に役に経つんだよね。よく視覚では属性が分からない魔法が存在するの。そういう時に魔方陣を形成しておけばどの属性か認識できて対策が打てる。魔方陣は相当必要なものね」照は次に「レギオン」と書いた。「レギオンは舞君はまだ習わないけど知ってて損はないのよ。レギオンは当事者の妄想を具現化したものなの。舞君は転校

してきたから知らないと思うけど新入生が入学する際《ハンフルオブ　アビリティ》っていうランダムで単一の能力を与えるものがあるんだけどそこで頭の中に浮かばせたものが具現化して能力を持った武器、レギオンになるの、能力が開花する時は人それぞれで異なるけど大体入学してから６ヶ月後までには開花してる。つまり秋くらいには完全にレギオンとして働くわけね。舞君のレギオンは聖杯によって生まれたものでクレチーはその持ち主だったんじゃないかな、まあ詠唱魔法が３つも使えるレギオンなんてチートと言わざるをえないね」「そのチートを使いきれてなかったら意味ないでしょ」照は舞久の言葉を聞き流して、「応用魔法」と書いた。「応用魔法は属性連陣魔法や重複魔法、属合成魔法等々があるけど応用魔法は魔法技術とランクがそれなりのものじゃなければ行使することは困難でね、魔方陣の形成速度や魔法の発動時間を短縮してなおかつ威力の高い魔法を放つ。こんなことを約２秒の間で実行しなければどの応用魔法も発動させることは出来ない。だから皆は夏休みに訓練所で魔法技術を上げてるの」照はマジックペンを置いて椅子に座る。舞久というと腕を組みながら「なんとなく理解はできました。魔法には属性があって魔方陣の色はその属性によって異なる。応用魔法は発展版で技術と理解がなければ行使出来ない。レギオンは単一の能力を持った当事者の妄想を具現化した武器ってことですよね、それとランクを上げる方法にどんな関連があるんですか？」「ランクはＴＥＮＴＨ　ＪＡＣＫ　ＱＵＥＥＮ　ＫＩＧ　ＡＣＥがあるけで最下層のＴＥＮＴＨがＫＩＮＧになることも可能なの、ランクは能力値で定められるの。能力値は潜在能力までは測定することはできない。つまり」「潜在能力を引き出せばランクは上がるということですか？でももし潜在能力がＫＩＮＧクラスなら今の俺が潜在能力をすべて発揮してたらどうするんですか？」「やらなきゃ分からないでしょ！」照は机を両手で叩いて言う。舞久は半信半疑で照の顔を見つめる。照はどこから湧いているのか分からない自信に満ちた表情で「じゃあ明日、コロッセオに１０時集合だから！」言った。

「分かりました」舞久は憂鬱になる。せっかくの夏休みに訓練なんてすることになるとは…「遅れたら罰与えるからね！！」照の声がいやに煩く聞こえて舞久の憂鬱は増すばかりだ。

「寝たい」

特訓〈1〉（前書き）

感想、アドバイスあればお願いします。

特訓〈1〉

午前１０時に訓練場に集合と昨日言われたが遅れたら罰と来た。あの生徒会長が行う罰と言ったら必ず恥ずかしい目に会うに決まっている。何せ、初対面でパイを顔にぶつけて大爆笑するという一般人からすれば総理大臣が国会でハルヒのハレ晴れユカイを踊るような暴挙だ。というわけで俺は7時にベッドから離れ、食堂に赴いたわけだが、やはり夏休みとあってか誰も来ていない。少しくらいは来ていると思ったんだがそんな早寝早起きを日課にしている奴はそうそういないだろうと思っていた。俺は食券を買って端正な顔立ちをした受付の女性に食券を手渡す。今日注文したのは鮭定食だ。白ご飯と味噌汁、そして鮭という至ってシンプルなものだが朝はこの量で十分だろう。

それに訓練、いや特訓か。特訓をするのであればこの判断は的確だ。などと考えているうちに鮭定食を受付の女性が持ってきた。俺はそれを受け取り短く会釈する。女性は俺に微笑みながら「今日も頑張ってね、若いんだからさ」と言ってくれた。そう言っている姿が凄まじく美麗だった。「はい、頑張ります」と俺は言う。今の言葉で俺の倦怠感は一気に消却された。あれは天使の囁きと言っても過言ではないな。俺は誰も座っていない椅子に座る。といってもすべての椅子が空いているからどこに座ってもいいわけだがな。

そしてまず鮭に箸をつけようと思って箸を手に取る。

するとエレベーターの到着音が食堂内に反響する。エレベーターは食堂の中にあるため到着音が響いてもおかしくはないがここまで響くとは想定していなかった。俺は鮭を口に入れて咀嚼しながらエレベーターの扉を見つめていると扉が開いた。エレベーターから出て

きたのは俺があまり会いたくないと思っていた人物だった。聖杯合戦が終わって旅館の縁側で俺にキスをしてきた医神だ。医神食券を買って受付に行く。ここまでは俺には気付いていないみたいだ。受付の女性と軽く談笑してから医神が頼んだらしい和風定食を受け取った。和風定食には旅館で茄子や山菜などの食材が入っている。俺達の世代では和風定食は不味い定食と連想してしまう。なぜなら家族と食べている時は確実に残すであろう料理があるからだ。そんなものをわざわざ頼む奴なんていない。

和風定食を受け取った後椅子に座るため医神は後ろを振り返る。案の定、俺に気付いて目が合った。俺は敢えて平然を装い、手を振る。別にこっちに来てくれという無言の暗示などではない。ただ目が合ったから手を振っただけだから他意はない。医神は手を振った俺に対して会釈する。そして隣の椅子に座って、「おはようございます」と言った。俺も「おはよう」と挨拶を交わす。「なぜ、早起きしてらっしゃるの？あなたそんなに真面目な性格はしてないでしょうに」と医神は動揺することもなく質問してきた。こいつは何も気にしてないのか？俺だけがいやに気を使っただけか。そう思っておいた方が気が楽だ。「生徒会長に呼ばれたんだよ。ランク上げるために特訓するためにな」「あら、あなたもランクアップしますの、私のクラスでも実行するものはおりますのよ。まあ私はもう上げることはできませんが」医神はそう言って漬物に箸を掴み、髪を手で押さえながら口に運ぶ。その仕草はしっかり躾をされたことを認識できる。「それに代々神生徒会会長に特訓をつけてもらうのは光栄なことですのよ。そこのところは自覚しなさい」「はい、はい…でお前はなんでこんな早くに起きたんだ？」

俺がそう聞くと深くため息をついた。明らかにこいつにとっていやなことを頼まれたんだろう。「あなた8月1日に肝試し大会が開催されることはご存知ですわよね？」医神は箸をお椀の上に丁寧に添えて置いてから言う。「ああ、確か言ってたな、そんなこと」夏休

み前のＳＨＲで肝試しのペアを組んどけって神野先生が言ってたな、結局忘れてたけどな。「その開催場所は京都の深泥池っていう心霊スポットなんですの、いわくつきの所でかなりの確率ででるんですの。しかもクラス代表は肝試しに出なくていいと言われましたのに下見しなくてはいけないと急に言われまして」

医神は肩を落胆させて声を漏らす。余程幽霊などの類には耐性がないのだろう。俺は鮭定食を完食したので椅子から腰を上げてトレイを取った。「まあ、精々頑張れよ。幽霊に会ったら話聞かせてくれ」医神はその言葉でムッとした表情を浮かべる。「他人事だと思ってたら大間違いですわよ。あなたも肝試しをすることをお忘れなく」医神はフラグ的な発言したが俺は敢えて無視して返却口に食器を置いて食堂を後にした。

医神から例のことで何か言ってくると危惧したがそれも杞憂に終わった。まあ今後に何かしてくるだろう。俺は一旦部屋に戻り、再び外に出て訓練場に向かう。今の時刻は９時５０分過ぎ、集合時間まで１０分の余裕がある。俺は訓練場の扉をゆっくり開けて中を確認する。「ちぇっ、遅刻せずに来たの、つまんない」「罰があるのを知ってて遅れる奴がいますか？それよりそこの巨大な扉はなんですか？」俺は中央にあるなんの飾り気もない全長１５メートルほどの巨大な扉を指差した。「ああ、これは虚現空間の扉なの、虚現空間は内部にいれば何も影響を受けない、つまり外部からの事象という事象を寄せ付けない空間であってね。この空間では何も気にせず特訓できるからね、まあ虚現空間を使用する意味は他にあるんだけどね」と説明してもらいながら俺は扉の前に立つ。扉の色はただ黒い。その黒さは不気味としか言い表わせない。これはどこの真理の扉ですかね？「ささっ、中に入って、入って」会長は扉を軽々しく開ける。マジかよ、これ開けるってすごくね？常識的に考えて。扉の向

こうは白色の世界、何も寄せ付けないため何にも染まらない。そういった感じだ。俺は虚現空間に足を踏み入れる。踏み入れた拍子に空間が黒に染まる。どうやら空間内では干渉することは可能なようだ。「凄いでしょ？私も初めて入った時は驚いたなあ…、さてと早速特訓開始と行きましょ」会長が入って扉が閉じる。そして扉は空間から消え去る。空間内は複数の事象が反発して鮮やかな色を見せる。

「それでは特訓の内容を言うわね」照の語調が真剣さを滲ませる。「特訓の内容は私の攻撃に堪えること、堪えることが出来なければ死ぬから」と言った。

特訓〈2〉

「特訓の内容は、私の攻撃に堪えること。堪えることができなければ、死ぬから」と照が言った。舞久は聖杯の剣を召喚する。もともと、一対の剣であった聖杯の剣は舞久がクレチに片割れの剣を渡しているため、一本しか剣がない。

舞久は剣を構える。「攻撃を避けるだけでいいんですか？俺はてっきり会長を倒さなければならないのかと思ってましたけど」自分が言うのもなんだが、会長を倒すことはギルガメッシュと戦うことと同義だ。と俺は思っている。

「別に私を倒してもいいんだよ。それが本当にできるならね」と照は言ってくる。すると、照は両手を広げる。「このセミナリオ生徒会会長、代々木照様の力を特と、ご覧あれ」

と妙に芝居がかったことを言う。この人は、こういう行動をして恥ずかしいと思わないのか？俺なら、軽く発狂するがな。と毒づいていると、舞久の周りに電気が迸る。「なんだ？これは…」最初は、少数の電気が迸っていたが、次第に電気は激しさを増す。「何、惚けてるの？避けないと死ぬわよ」と照が言った直後、舞久がいる場所に雷が落ちる。凄まじい轟音が鳴り、耳をつんざく。「くそっ、危ねえ。本当に死ぬところだった」舞久は空中に飛んで、回避する。照は、舞久に視線をやる。「空中に回避したのは、正しい判断ね。もし、地面に立ったままなら、雷の衝撃でやられてたからね」と照は言う。おいおい、抜け目ない攻撃するな、この人は。それに俺が空中に回避することも読まれてる。先手を取られたな。すると、「プレイリスト」と照は言う。舞久は地面に着地する。その時、聖杯合戦での戦いの記憶が頭を過る。確か、プレイリストは時彦が使用していた魔法だ。あらゆる魔法を２０個ストックできる応用魔法の一種だったような覚えがある。いわば、魔法を装備できる魔法だ。

照はプレイリストを発動する。そして照の背後に魔方陣が形成される。
すると、数字が出てきたが数字は１　２　３　４　５しかなかった。
「プレイリストは１～２０まであるんじゃ…」と舞久は数字を見ながら言う。「舞君が言ってるのは、初期状態のプレイリストね、プレイリストは使用していくほど進化していく魔法なの。そして、最終形態のプレイリストはストックの上限が５になり、より効率的で強力な魔法を装備できるの」と照は言った。数字が魔方陣の前で浮遊している。プレイリストは発動するまで数字にどんな魔法が装備されているのか認識することはできない。俺には、身構え、どんな攻撃が来てもいいように神経を集中するしかない。
そして、照は数字の１を手に取る。１は赤い炎を纏いだした。
舞久は、《高速の脚力》で瞬時加速する。さらに剣を構える。「《灯籠の槍》」１が炎を宿した槍に変化する。そして、照は炎の槍を舞久に向かって投げる。直線的な軌道を描きながら、凄まじい速さで進む。「《聖者の閃光》」舞久の周りに複数の白い剣が現れて、炎の槍に向かって飛んでいく。白い剣と炎の槍が激突する。舞久は、跳躍して、前方の爆風を避ける。さらに、剣を水平にして、前に出した。「《白雷の霹靂》」舞久の周りを《聖者の閃光》より何倍もの白い剣が現れる。約１００本の剣が照に放たれる。照は、２を手に取り、握り潰した。照の拳は緑の光に包まれる。そして、舞久に２を握り潰した拳を向けた。「《風神の嗜み》」照の前に巨大な竜巻が現れ、白い剣は凄絶な風の猛威に曝される。すべての剣の軌道が反れて、何もない所に突き刺さり、霧消していく。「くそっ！」
舞久は、《高速の脚力》で加速し、照に斬りかかる。照は「遅すぎ。」と呟いた。そして、３を手に取った。３は、紅色の剣に変化する。「《ファイストスの剣》」照は、舞久を向かえ撃つ。聖杯の剣とファイストスの剣がぶつかる。衝撃が生まれ、白と赤が交わり、絢爛豪華な景色が生まれる。「くっ、うっ」舞久が照に押される。「はあっ！」照は剣を力強く振りかぶり、舞久を押し飛ばす。ファイス

トスの剣は、攻撃力に特化した剣であり、全力を出せば、山一つ壊せるくらいの威力を誇る。
舞久は地面に剣を突き刺し、止まろうとするが、中々止まらない。
「力が強すぎだ、人知を越えてやがる」と舞久は負け惜しみを言う。あんなでたらめな武器なのにレギオンじゃないということは、会長はまだ、本気なんて出していないはずだ。
照は、ファイストスの剣を左手に持ちかえ、４と５を右手に取る。すると、４と５は混ざりあう。ぐちゃぐちゃに混ざりあい、黒い球体に生成する。「なんだ？あの黒い球体」なんかガンツに出てきそうな物だな。
舞久はなんとか剣と地面の摩擦で止まることができたが、照とは距離が大幅に開いてしまった。また、距離を詰めるのは難しい。どうする？と舞久が考えていると黒い球体は照から離れ、空中に移動する。「展開せよ。」と照が言うと、黒い球体は拡大して、広範囲を覆う。舞久がいる範囲まで覆われてしまった。

周りを見ても、すべて黒一色に染まった風景が広がっている。舞久は辺りを執拗に見ながら、歩いていく。だが、歩いても距離感が掴めない。多分、同じ色で同じ景色が広がっているためだろう。

「《糾罪をする審判主》」照の声がどこからどことなく聞こえた。舞久は辺りを探すが照の姿は見えない。黒い球体の中にはいないみたいだ。すると、黒い天井から黒い鎧を着て、黒い刀を持って、すべて黒に染まった人型の物体が降りてきた。
これが会長の詠唱魔法か？と舞久は推測する。黒い人型の物体は地に足をつける。着地した衝撃で鎧の軋む音が聞こえた。「この魔法は、私が初めて創った魔法なのよ。ところで、自分用に創った魔法を創世魔法というんだよね。創世魔法は、魔法のシステムを一から分かってないと創ることはできないの。例えたら、曲を作ることと同じかな。それでこの「《糾罪をする審判主》」は、審判主がこの

黒い球体の中にいる対象を殺すまで戦い続ける。ここを抜け出す方法は一つだけ。」
「審判主を倒せ、ですよね？」と舞久は言う。「ええ、そうよ、必ず、倒しなさいね」と照が言う。「やっと、修行らしくなったな。まあ、めだかボックスの安心院さんは修行編が一番需要が少ないって言ってたけどなあ」
舞久は、剣を構え、魔方陣を足に形成する。「主人公がどれだけ修行編で汗水垂らして頑張ってるか教えてやるよ！！」と叫んで、舞久は、《高速の脚力》を発動させた。

次回、舞久がかなりチートに覚醒することになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5162z/

セミナリオ

2012年1月9日03時50分発行